木村毅と英文学

藤　井　　哲*

はじめに

英文学者で福山出身の福原麟太郎（1894－1981）は，東京高等師範学校を卒業後は母校で教え，研究者としての表街道を進み，教授になり，多くの業績を残した．その彼が生まれたのと同じ年に（8 か月早く）ひとりの「投書家あがりの文士」が福山から 100km 少々しか離れていない同じ中国地方にある美作の地に生まれていた．かつては明治文化研究者として主に日本文学関係者の間で知られていた木村毅（き）（1894－1979）のことである．[1]

「一ど書物でよんだ事なら，めったに忘れない」（【7931】p. 24）という抜群の記憶力に扶けられながら，小学生で始めた雑誌投稿によって身についた文章術を駆使して，木村は文芸論，小説，人物論，紀行文，歴史書，時評，日欧文化交渉史，スポーツ文化史など，それこそ医学と理系の分野を除いたあらゆる領域で二百数十冊という著書の山を築いた．[2] それらの単行書については谷沢

---

* 福岡大学名誉教授

[1] これは楽屋落ちになるが，筆者（藤井）は『福原麟太郎著作目録』（九州大学出版会，2014）を執筆しているうちに，こうした偶然に気づくことができた．

[2] 谷沢（1972）は『明治文化のチチェローネ』とでも題すべき木村の著作集を提案し，16 分野の「○○史篇」で編成して入念な索引を添えれば，「便利この上なき明治文化史事典」になると請け合っている．

永一の労作「著書目録」(1966〜1993) があるが，共著書や新聞・雑誌への執筆の経歴ともなると，谷沢 (1979) や尾崎 (1972) に断片的なリストが見られるくらいで，ほとんど未開拓状態のままにある．

書誌が整っていないので，85 年の生涯をカバーした伝記はない．【7991】は自叙伝として情報に富むが，33 歳まで記されたところで絶筆になってしまった．まとまった木村論の存在も筆者は寡聞にして知らない．何しろ学界の権威に向かって在野から歯に衣を着せず噛み付いてきた木村なので，谷沢 (1979) に謂わせると，「戦後の学界は各種事典の解題に見られるように，木村毅を〝先駆者〟と呼んでアタマから棚上げし，時代おくれの雑学売文家として歯牙にもかけなかった.」という扱いをアカデミズムから受けてきた．それでも多分野で読者を愉しませてきた文人には違いないから，後世のために彼の業績を整理しておく意義はあろう．ところが，そうした試みがなされた気配はなさそうである．あまりにも広汎な教養を背景に何にでも一家言あった文筆家を向こうに回したところで，今日の分業化された研究者には業績を掌握しきれないというのが正直なところであろう．

30 歳頃から月 100 枚は書かないと家族を養えないとぼやいていた木村であったから (【26X1】)，70 年間にわたって彼が執筆してきた枚数の総計は単純計算でも 80,000 枚を超えるが，速筆なうえに締切に遅れないのが好感されて依頼も増えていったであろう．生活費に貢献しない研究のための原稿も書いたであろう．旧稿の再利用もしていたから，生涯に活字化された原稿の総枚数はどれくらいになったであろうか．アカデミズムには背を向けて，ジャーナリズムの世界を筆一本で生き抜いてきたという自負もあって，本人は叩き上げの「文士」を自任していたが，顧みれば彼には早稲田大学の英文科卒業という立派な学歴があったのである.[3] しかも 66 歳 (1961) になって，母校より新制度

[3] 筆者も 1970 年に早稲田大学第一文学部の入学試験に合格していたので，木村には先輩に対して抱くような親近感を覚えないでもない．

による第1号の文学博士の学位を授与されていた．1978年には，「明治文化研究者として一時代を画し，文化交流に在野からいくたの貢献をし常に時代の先導的役割を果たした」との功績が認められて，第26回菊池寛賞を贈られている（【8051】）．そして「最後の投書家あがり文士」（【7991】p.384）として，1979年の9月18日に85歳の生涯を終えた．それは，福原に先立つこと1年4か月の死去であった．

どの分野について書かれていても，彼の文章にはジャーナリストならではの筆勢が充満していて，いま読んでも古めかしさや持って回った堅苦しさとかが感じられない．「評論でも研究でも，彼はたえず語り口に工夫をこらし，面白く読ませることを心がけた．その叙述はつねに具体的でわかりやすく，エピソードを山と盛りつけて人を楽しませ，またしばしば意表を衝く話柄を持ちだして読者の興をつのらせる．」と向井（1993）も解説している通り，とにかく読み出せば分野を問わず誰もが引き込まれてしまう．英文学しか勉強してこなかった筆者でさえ，領域を異にする彼の文章を読んでいて時の経つのを忘れることがしばしばなのである．

そこで筆者は，英文学の側に引き寄せて彼の蘊蓄を掻き取ってみようと思い立った．近頃の英文学論では「興をつのらせる」文章にお目に掛かれるチャンスはあまりないから，筆者のように木村の英文学論を面白く読む者が増えるといい．そうなれば，他分野の読者たちも彼を取り巻いて，各々の感性で彼を撫で回すようになるかもしれない．包括的な書誌が試みられることだってあるかもしれない．そうこうするうちに，この巨象ならぬライオン[4]の全貌が捉えられてくるであろう．

そのために筆者は，木村の残した著書と雑誌記事を相手に，内容の見当を付けながら読み進めて（ゆえに参照文献表が長くなった），彼の英文学との接点

[4] 内田魯庵が【2642】に寄せた「序」よると，木村が用いた筆名に雷音（らいおん）というのがあった由である．

や関心の所在を窺わせる記述を書き抜いてきた．本稿はそれを材料にして構成された基礎資料的な報告なので，いわば引用のパッチワークといった様相を呈している．それだけに出典の表示が煩雑になり兼ねず，できるだけ【文献番号】で済ませ，頁数の多い資料に対してのみ当該ページを付記するようにした．

第１章　生い立ち～早稲田大学卒業直後

木村毅（き）は，明治 27（1894）年 2 月 12 日に，岡山県勝田郡勝間田村（現在は美作市に隣接する勝央町）に生まれた．この辺の事情に詳しい【7991】を適宜参照すると，父 彙（しげし）は林園書院という漢学塾を経営し，村長を何度か務めるほどの土地の名士であった．毅の長兄は後に大阪で小学校の校長になり，姉は「岡山県立女子師範学校の第一回卒業生として，岡山県の養成した初訓導」になった．そうした家庭に四男に生まれた毅は，書物に囲まれて育ち，並外れた記憶力にも恵まれたので，小学校（尋常科と高等科があり当時は各 4 年制であった）でも級長を任されてきた文学少年であった．

11 歳のとき，【75X1】によると，『中学世界』（博文館）の明治 38 年秋期増刊号であった『世界三十六文豪』から，英米文学では Milton，Shakespeare，Hawthorne，Scott，Emerson，Tennyson，Byron，Poe，Dickens といった作家名[5] を知るようになり，それが「私の Weltliteratur の知識の出発点となった」（p. 62）由である．小学校高等科三年生すなわち 12 歳で『少年世界』（博文館）に送った投稿が採用され，自分の文章が活字になる悦びを知ることになった．14 歳になって，『文章世界』（博文館）の明治 41 年春期増刊号である『近

[5] Full name や生没年を逐一記すと煩わしくなるので，著名な文人については適宜それらを省略した．

代三十六文豪』からSwinburne，Meredith，Hardy，Stevenson，Kiplingの名前にも馴染んだので，この「二増刊は，ちょうど少年時代から青年時代に移り代ろうとする時の私の世界文学の知識を拡げるのに，大きく役立った.」（p. 81）ことになる.[6] 小学校を卒業したら津山の中学校（旧制で5年制）に入学することは本人も村民も疑わなかったが，稼業が左前になり教育費が毅にまで回らないことが判明して，（小兄で早稲田が大学になってからの第一回生であった）省三が卒業するまでの1年間だけ足踏みさせられることになった.

明治41年3月に14歳で高等科を卒業して，中学に進学せずにいたところ，【7991】によれば，本格的な投稿雑誌である『文章世界』の11月号に矢野禾積（かづみ）という投稿者の詩を読んで彼は「ドギモを抜かれ」（p. 43）る思いをさせられた．追いかけるように同誌に投稿してみたら，彼も翌年の2月号で一等に当選するという快事が出来したのである．それからは雑誌投稿に中学の教室に代わる修練の場を見出すようになった.「投書に踏みきらせ，それが私の一生の一重要契機をなしていることで，私は矢野君に感謝しなくてはならん.」（p. 48）とも記していたが，その矢野君とは，英文学者で詩人の矢野峰人（ほうじん）のことで，毅の叔父の遠縁であったらしい．同様に，英文学者の「阿部知二にいたっては，私の父の出た家で，彼とは又従兄弟になる」（p. 316）ということでもあるから，毅の家系には英文学嗜好の気質が潜んでいたのかもしれない.

こうして，早稲田大学の高等予科を受験できる17歳になるまでの3年間を，投稿もしながら，帰省してくる小兄からは早稲田の授業風景を聞いたり，講義録を読んだり，兄たちを頼って関西に放浪するなどして過ごしていた．友人の影響で挿絵画家になろうとして上京し，竹久夢二に挨拶したこともあった．ま

[6] 【75X1】によると，以来「それらの文人がどう繋がるのか…脈絡あるものとしては何もつかめない」（p. 81）でいたところ，1912年に早稲田大学で島村抱月の「欧州文芸思潮史」を受けて，古代ギリシアの道徳とキリスト教という文芸の二源流を教えられ，「一生の研学方針はこれできまった」（p. 84）くらいの感銘を受けたそうである.

た，『文章世界』の主筆で早稲田に出講していた田山花袋を表敬訪問して，彼から「絵をやる？ 君の才能は文学に，より適している．迷うことはないじゃないか」（p. 76）と激励されたりもしたそうである．ちなみに，彼の投書家としての原点は笹本（1934）からも窺えるであろう。

中学を卒業していれば無試験で予科に入れた時代であったが，彼の場合は先ず早稲田中学の卒業検定試験に合格しなければならなかった．そのために独学で準備をしたが，とりわけ英語学習には親戚の家にも通いながら励んだ．【6911】が明かすには，*Barnes's New National Readers 4*（1883）まで了えて，二葉亭四迷が Turgenev の *Rudin*（1855）を邦訳した『浮草』（1908）を座右に，**Constance Garnett**（**1861—1946**）による英訳を，「たっぷり二か年はかかったと思うが，二六〇頁の全冊を，対照して読みおわった．この終了した日が，私の読書生活に一線を劃する．これで，どんな英書でも読みこなせるとの自信」を与えられることになった．[7] 更に【75X1】によれば，そうした覚醒は，早稲田で読解力を鍛えられながら，英訳を介して世界の文学に親しむ変則的手法に彼を導くことになり，「通り一遍の規矩準繩をはずれ，アカデミズムに背を向ける気風は，この間に訓養せられた」（p. 42）のであった．[8]

1911 年 9 月，17 歳になった木村は早稲田大学高等予科文学部に入学できた．全 3 学期あるうちの第二学期に編入された．【7991】に読むと，試験科目の数学は 0 点と思われたが，教務課に訊くと「英文科だから数学はどうでもよろしい．…ついて来られそうだとの見こみのある学生は，みんなパスさせ」（p. 85）ているが，「予科から大学になるとき，思い切って大量に振り落とす」（p. 112）

[7] 引用元は【6911】であるが，【7991】（pp. 52 & 82）の 2 か月間のほうが妥当であろう．
[8] 当時は中学を卒業していないと，官立である高等学校から帝国大学という表街道を歩めないことになっており，木村の場合でも現役大学生でありながら兵役を免除されなかったという不利益につながった．

というのが早稲田の方針であると説明されたらしい．しかし当時の「官立高等学校は三年だのに，早稲田の高等予科は一年半…どうしても語学力が劣るというので…国語漢文をのぞくほかは，全部英語の教科書を課して」（【6441】p. 220）いた．それで科目を履修するうちに，彼の意識のなかの〝英語＝英文学〟であった発想が次第に〝英語≒文系諸科目全般〟に変化して，英語を介在させた視野と守備範囲の拡大に寄与したと想像される．

西条八十と同級の予科 E 組（D 組には坪田譲治や直木三十五がいた）に配された木村が受けた「最初の授業は若き片上伸（のぼる）講師がテニソンの「ロートス・イーターズ」を講読し，私は感きわまる思いで，涙ぐみそうであった.」（p. 87）と，70 年経った【7991】で回顧している．片山の授業では更に Poe の “The Fall of the House of Usher”（1839）や米国の哲学者 **William James**（**1842—1910**）の *Is Life Worth Living?*（1890）も読むことになった．予科最終の第三学期には，吉江喬松（きょうまつ）の授業で「初めてキイツの詩の美しさに接し」（【5611】p. 258）てもいる．また教科書として読んだ Victor Hugo の英訳本が思いの外に読み易かったので，「大陸文学の英訳は，僕にだって読める」（p. 259）と，*Rudin* を読破したときの確信を新たにしている．そのいっぽうで，「在学中は英文法が悪夢のように私をおどかしつづけた」（【7991】p. 129）とあるから，彼の読解力は力技で組み伏せてしまう変則に偏っていたようだ．

1912 年に，英文法のできなかった彼は「思い切って大量に振り落と」されることもなく，大学部（当時は 3 年制であった）に「おなさけ免状」で及第させてもらえた．当時英文科では第一部は中学教員免許を取得させるため年 10 科目以上を課したが，文壇やジャーナリズム志望者が集まる第二部は年 6 科目の履修と年一篇の研究論文の提出を課すだけのカリキュラムで，木村の乙組は 20 名規模のクラスであった（【7991】pp. 116－117）.[9] そうしたクラスでは，ロ

[9] 当時の学務上の諸規則については木村自身による記述にも不一致が見られる．未確認なままなので参考程度でしかない．

シア文学であれば例えばGarnett版であったり，フランス文学ならHearn版であるとかの「英訳で事足りて，些少の遺憾も覚えず，まさに英訳で凡てであり，英訳万才」（【75X1】序）という気風があったために，原語で文献に挑戦するのは少数の優秀な学生に限られており，「一般学生は，英語で一さいを弁ずる方針」に従っていた．そのうえ木村は，「英文科の學生だったが，英作文なんて，てんで，やる氣がなく，ちっとも練習しなかった」（【72X2】）し，「英語の会話などやったことが…」（【7991】p. 187）と，もっぱら読むための英語力を増進させていたようである．そうした環境において彼はどのような英文学と出遭ったのか，また卒業までに提出された〝研究論文〟にどのような木村らしさがあったのだろうか．

入学してすぐのことであろうが，【7991】によれば，「必修科目の中では，坪内逍遙の「ジュリアス・シーザー」（シェークスピア）の講義」で感銘を受けていた（p. 130）．他にも片上の授業で読んだIrelandの作家 **George Augustus Moore**（**1852—1933**）の自叙伝 *Confessions of a Young Man*（1888）は，「のんきな調子の筆づかいで，…なかなか面白かった．」（p. 371）らしく，内ヶ崎作三郎には **Thomas Carlyle**（**1795—1881**）の *Sartor Resartus*（1838）を教わったようだ（p. 117）．

その間に，島村抱月の「欧州文芸思潮史」に刺戟されて，ポーランドの歴史小説 *Quo Vadis*（1896）について（もちろん英訳本で読んで）進級論文にまとめようと思い立ち，「最近世界文芸思潮」の担当者であった相馬御風に相談してみた．ところが，「なに，シェンキウィッチ？　知らんなあ．そんな通俗作家なんぞ．僕は興味を動かした事さえない」と鼻であしらわれてしまい，木村は激しい嫌悪を相馬に覚え，彼が仕切っていた『早稲田文学』から文壇にデビューする正道を諦めて通俗小説研究を決意することになったらしい（【7991】pp. 140－141）．

結局進級論文には *Quo Vadis* をやめて，島崎藤村の『春』から知ったDos-

toyevsky の *Crime and Punishment*（1866）を選んだ．この辺の事情については【75X1】の第十三章（pp. 305－335）に詳しいが，10 年振りに英訳が再刊されたことが大きく作用したらしい．それを「一日に，五，六頁ずつ位よみ続け…二か月もかかって」（p. 310），辞書をひきひき苦労して読んで，初めて英語小説を注釈に頼らず読了する経験を得た（【7991】p. 123）．そして読んでみると，「島崎藤村の「破戒」は，作の形式はおろか人物の出し入れまで，すっかり「罪と罰」をそのまま模倣している」（【5611】p. 262）ことが判って，それを指摘したら片山から高い評点をもらったそうである．すなわち，ロシア文学であっても英訳を用いていれば英文科の課題論文として受理される慣行が，学生と教員の間で了解されていたことが窺える．

1913 年，木村は席次 2 番で二年生に進級してクラスぢゅうを驚かした．「仮り及第の後遺症からは，すっかり建て直った」（【7991】p. 136）せいか，彼は *Ivanhoe*（1819）を「六か敷さに手こずりながら，読了し」（【7731】p. 10）ており，その妙味を識って Scott を身近に感じるようになった．その頃の早稲田には「小説」の講座がまだ置かれていなかったらしく（【7991】p. 302），教科書で読まされたというよりも若き日の逍遙に倣おうとしたのかもしれない．前期には吉江喬松の「イェーツ研究」で“Countess Cathleen”（1892）と“The Land of Heart's Desire”（1894）を教わって，『三四郎』のなかの與次郎でも書きそうなレーポートを提出したが，「私は新しい象徴詩には感度がにぶく，さっぱりピンと来ぬ」ながらも「いい勉強にはなった．私はその後イェーツに関しては，特別に研究したことはない」（【7991】pp. 143－144）というのが，木村にとっての **William Butler Yeats**（**1865—1939**）であった．またこの頃であろうが，同じ Ireland の **George Bernard Shaw**（**1856—1950**）を逍遙が講じた授業も受けていて，「面白いとは思ったが，性に合わないというのか，どうも好きだというわけには行かなかった」（【5611】p. 210）という印象を得ていた．それでも後年には，Shaw の訪日に随行した経験を通して彼の人間性を称

賛するようにはなったが，その文学を論じることはなかった．

三年生に進級するための論文では，『虞美人草』ちゅうの青年哲学者甲野が書いた設定になっている卒業論文「哲世界と実世界」を「自分流にその内容を埋めたものを書いてみよう」（【5611】pp. 262－263）と思い定めた．【26Y1】によると，ちょうど二年生のときに北玲吉（れいきち）の授業で Rudolf Eucken の書 *Meaning and Value of Life*（1908）に「精神生活の哲學説」を読み，予科時代には片山から *Is Life Worth Living?* を教わって「プラグマチズム（實證主義）を宗教的にした哲學」に触れていたので，両書を対照させて「人生の意識と価値」についての「途方もない報告を出した」由である．背景には「當時の早稲田の文科の生徒がみな言ひ合はせたやうに唯物的傾向の人だつたから，それに逆ふ気」もあったらしいが，締切に遅れての提出となってしまった．ちなみに【3453】において，漱石の「「文學論」などは學生時代に五六回は繰返してよんだ．私が多少でも英文學を讀み囓つたのは，大抵あの本を案内とした．「文學評論」も面白かつた．「創作家の態度」なども面白かつた．彼の文藝批評にはやつぱり道義が根本をなしてゐる．」（pp. 233－234）とあるのは，木村が『虞美人草』に触発されたこの時期につながるのかもしれない．

こうして 1914 年 9 月に大学部三年に進級したが，その年の 12 月 1 日になって在籍のまま鳥取の連隊に入隊させられている．中学を卒業していなかったばかりに兵役を免除されなかったせいである．向かっ腹を立てた彼は，入営中も斜に構えて，満期除隊直前まで二等卒を通した．筆の立つインテリだからと腫れ物扱いされるままに，練兵の合間を利用して *Oliver Twist*（1838）や *Anna Karenina*（1878）といった長篇小説を Everyman's Library で読破している（【7991】pp. 157－158）．**Charlotte Brontë（1816—55）**の作品で軍服着用で読むにはいささか気恥ずかしい *Jane Eyre*（1847）も読んでおり，「ヘレン・バーンスと云ふ肺病の少女の挿話に感動させられた．もし私に少女小説でも書く機會が與へられたら，最初に屹度これを飜案するであらう．」（【2641】p. 122）と

まで惹かれたのは，入営に伴なうストレス解消のために耽読した影響かもしれない．また，漱石が好んだという Meredith の長篇小説 *The Egoist*（1879）にも挑戦したが，今度は「てんで歯が立たぬ」と転進を余儀無くさせられる経験もしていた（【7991】p. 164）．

2 年間の兵役を終えて 1916 年に復学したので，いよいよ卒業論文である．【7991】に明かされる理由がいかにも木村らしくて，前回は「哲学的題材では手を焼いたから，こんどは作家論をえらぼうと思い，フランスの自然主義の泰斗なる「フローベル」にした．よんだことはないが一番作品数が少ないと思ったからだ.」（p. 179）と，本末が転倒した選択法であった．英訳された作品をまとめて丸善に注文したが，「『マダム・ボヴァリィ』を半ばも読みすすまぬうちに，しまった，これは題目の選択をあやまったと思った．フローベルは，感触の冷やりとする貧血症の作家なのが，私の肌にあわない.」（pp. 179－180）と，幻滅させられたからである．英訳があるのなら怖いものなしと鷹揚に構えていた報いであった．そのため執筆が難航したが，折良く「早稲田の図書館にエミール・フェゲェの『フローベル研究』が購入されたから，大いに啓発され」（p. 194）て，期限内に提出できたそうである．これまた木村らしく，要領の良い仕事捌きであった．当時の彼にフランス語の文献を読めたかどうかは定かでないが[10]，Émile Faguet の *Flaubert*（1899）は 1914 年に Houghton Mifflin から英語版になって出ていたので，おそらくそれに救われたのであろう．

またしても英文学論ではなかった．英訳でフランス文学を論じて英文科を卒業したのであるから，自由放任の学風にも筋金が入っていた．もっとも本人も identity には幾分か不安を覚えたのであろう，我が身を【5651】で省みて，

[10]【7991】に，「「天才組」には第二外国語の科目がなく，したがってフランス語はやっていない」（p. 136）．また【36Y1】では，「巴里へ來てからアリヤンス・フランセイズと云ふ語學校に入つて，午前と夜と俄仕立に詰めこんだ私のフランス語では，論文なら分るが小説は讀めない.」（p. 130）とある．

> これでも英文専攻である．たとえ私立大学ではあっても，英文科出身の文学士だ．…英文学にふれる事が，如何に浅薄で粗雑であったかを思うて，自分ながらちょっと耻しい気がした．［改行］では，英文学の修得は，私の心に何の痕跡も残さなかったかというと，まんざらそうでもない．私という人間ができ上るのに（それは平凡人であるだけにその代り，全人類の最大公約数として考えられる），やっぱり相当な感化を受けている．（p. 86）

と，英文学に触れてこられた学生生活に満腔の感謝を覚えながら，彼は早稲田大学の英文科を 1917 年 7 月に満 23 歳で卒業した．【7991】が伝えるには，42～43 人の「クラスの九番で卒業でき」たから頑張ったものである．なおその年の首席は，すべてフランス語の文献で論文を書いた平林初之輔で，木村の二，三番下には高田保や小泉一雄（Hearn の長男）がいたそうである（p. 194）．

卒業して 3 年経った頃に発表した論文【2091】すなわち「英吉利文學に現はれたる戀愛」及び【2111】「現代英米文學」は，一般読者向けに定番的な作家を並べているが，そこには木村が学生時代に植え付けられた英文学の種と卒業してからの読書歴とが反映されていると考えられる．それゆえにその後 60 年間の文筆活動で彼が興味を示すことになる作家名も混ざっているので，駆け出し時代の彼が英米文学のどの作家に対してどのような認識を持っていたのかが窺われる．

先ず【2091】では，「英國文學は熱愛すると言ふ低度（ママ）ではないとしても，かなり好きである」と，ディレッタント風を吹かせてから，「亜米利加の文學を殊更にイギリス文學から引離して見て，其處にどれ丈けの異なつた特色があるかは疑問」であると，彼の持説ともなる米文学観を覗かせている．【2091】に挙げられた英米作家 20 名のなかから，彼が後に触れる 11 名についての見解を要約しておこう．○ Shakespeare : *Romeo and Juliet, Antony and Cleopatra,*

Hamlet, Othello のそれぞれで heroine たちは各様の恋愛を経験する．○ Richardson : *Clarissa* は恋愛小説として，逸話ともども有名だが未読．○ Scott : *Ivanhoe* を映画（米 1914？）並みに面白く読んだ．「英米の文學は猶太の老人を描けば，屹度強欲非道なものにするが，娘を描けば實に天使の様な，ほれぼれとする姿にする．」 ○ Brontë : *Jane Eyre* は作家の人生苦が窺われるので「愛讀書」であり，Helen Burns の臨終は「可憐を極めた挿話」である．○ Hearn : *A History of English Literature* から彼の *Jane Eyre* 評（原著 pp. 738－739）を一部引用．○ Meredith :「近代的婦人を描いた」*Diana of the Crossways* の「難解な文章は到底僕達の語學の程度では讀みこなす事は出来ない．」 ○ Hardy : *Tess* よりも *Jude* のほうを「心理の機微に觸れて居て面白く思つた．」[11] ○ Hawthorne : *The Scarlet Letter* の heroine を「尊敬する氣にはなつても愛慕する氣にはなれなかつた．」 ○ Poe :「ホーソンを除いて米文壇に特殊の地位を占め」，散文詩を読んだ記憶がある．○ Bertha Clay : 米国の通俗作家ながら *Dora Thorne* は「家庭小説としては上乗のもの．」 ○ Tennyson : 短詩 “Dora”[12] を読んだ．

【2111】のほうは，現存の英米作家から当時の時点で興味深いか将来に期待できそうな数十名を並べるうち，10 名について彼の関心の所在が示唆されている．○ Hardy :「建築學的なプロットの堅實さと，ゴシック式な感じの端嚴さ」を作風とし，厭世的であつても「ふふんと冷笑(せゝらわら)つた所がない」のが日本人受けするところ．○ Conrad :「人物の外形的行爲にリヤリズムを發見しないで，人の心の中にそのリヤリズムを發見し」て，日本では最も持て囃されている中堅的存在．○ Wells : 推論の厳正さで Poe に並ぶ．多くの科学的仮説を活かして，社会の諸問題を「時勢に先んじて，一世の思潮を開展させ」た中堅．

[11]【7991】（p. 144）によると，彼は大学二年のときに *Jude* の精読を試みたことがあった．
[12] おもちゃのような短詩で，逍遙の『英詩文評釋』（東京專門學校，1902）で読んでいたのであろう．

○ Bennett : 前二者よりちょっと落ちる中堅で，「『文學の鑑賞』その他の論文随筆も廣く讀まれてゐる．」 ○ Moore, Kipling, Symons, Haggard, Doyle : 「早く吾が國にも紹介せられ」て著名な存在．

上述の 19 名が爾後の木村の文章でどう言及されるかが観察の対象になり得るが，英文学側が 16 名で 3 名の米側を圧倒しているのは，【2091】での米文学観とも合致する．このリストに重厚感が足りないように感じられるのは，木村の読書経歴がまだその段階にあったことの反映であろう．後に彼の視野に新たに入ってきた文人もいるし，大小を問わず言及を拾えば顔触れは賑やかになるが，すべてを並べても彼の好みや傾向を曖昧化させる懼れがあるし，筆者（藤井）にはそうするだけの十分な材料も気力も持ち合わせがない．したがって以下においては筆者の印象に残った範囲で，作家たちを取り上げていこう．

第 2 章　Lafcadio Hearn

木村は【2492】で，**Lafcadio Hearn**（**1850—1904**）のことを「十九世紀の英米十大文豪の一人に數へられてゐる位で，日本に歸化したのは忽體ない程の偉い文學者であつた」（p. 237）と強調している．早稲田卒業の翌年に出版社隆文館の編集員に就職した彼は，【2641】によると，会社帰りに日比谷図書館で 2 冊の新着洋書に目を留めた．書名は *Interpretations of Literature*（1915）とあり，2 年程前に刊行されていたことになる．早速借り出して「先づバイロンの所を開いた．あんまり面白いので夢中で讀み耽つた．それからメレデイスの所を讀み，キーツの所を讀んだ．——そしてすつかり魅せられ」てしまったのであった（p. 123）．

【7431】でも略説されているが，Hearn が帝国大学の講義で「『第四リーダー』程度のやさしい英語で，一語一語ゆっくりと口述するのを，学生たちは

天上からの神託でもきくような敬虔な気もち」で筆記して，そのノートは大切に保存されていた．それを米国 Columbia 大学の John Erskine 教授が校合して，*Life and Literature*（1917）と *Appreciations of Poetry*（1918）と併せて，大判 4 冊の講義録を Todd & Mead から刊行しつつあった．その 4 冊とは別に，Hearn を聴講した田部隆次，落合貞三郎，西崎一郎が 1900〜1903 年の筆記ノートを持ち寄って 2 巻本の *A History of English Literature* を 1927 年に北星堂から出すことになって，「後代のわれわれもその講筵に列した思いができるのは，幸福と言わねばならない」と木村を感喜させた．彼はこれら 6 冊の講義録を刊行とほぼ同時に購入出来たからであり，その巡り合せは彼に終生の英文学の師との出遭いをもたらせることになったからである．

後に，「それらの講義はどれも私の愛読書で，ひとつのこらず私はそれを渉読したばかりではない．ある章は何回となくよみ，全体にわたっても二回や三回はよみ返した」（p. 506）と【6051】で回顧したほどに信奉し，彼による Hearn への言及は大変に多い．まとまった言及として筆者の目に留まっただけでも，【2091】【2151】【22X1】【2641】【2642】【33Z1】【3453】【55Z1】【6051】【65X1】【6921】【7051】【7331】【7431】【75X1】【7991】などがあり，ざっと見ても 1920〜30，60〜70 年代に拡がり，遺作の【8091】にまで及んでいた．なるほど Hearn は英文学史に登場する作家ではないが[13]，木村の英文学理解に及ぼした影響の大きさに鑑みて，ここに一章を設ける必要を感じた次第である．

彼も含めて，直接 Hearn の「講義を教場で聞かなかった者が，後世において時をへだててよんでも，それほどの影響感化力を，それがもっている」（【6051】p. 506）ために，木村もまた一読三嘆を繰り返すうちに感化されて，

[13] Hearn は米文学の作家じゃないかと決め付けると視野を狭めることになる．彼の父は Ireland 出身の英国軍人，母はギリシアの女性で，米国人の血は入っていない．中等教育をフランスと英国で受け，渡米後ジャーナリズムで食いつなぎ，来日して中学〜高校〜大学に教えながら日本文化を海外に紹介した．ゆえに日本では，帰化して日本人に英文学の手解きをした英国系英語文学作家小泉八雲として今日まで親しまれてきている．

講義録を金科玉条と奉じながら文学上の自説を形成させていったと想像される．例えば【2492】では，*Interpretations* に“Literature and Political Opinion”を読んで，「國民性を如何にして了解させるかと言へば…文學の力を藉るより外には方法がない．」（p. 269）と唱える Hearn には，「文藝が國際的に働く力」（p. 273）に注目してきた木村としても自説を代弁してもらった気がしたであろう．また【6051】でも，*A History of English Literature* ちゅうの“Notes on American Literature”で，「文学ではこの空想的部分が重要であるばかりでなく，外国文学で君たちにほんとうに益するところあるのは，その部分のみである」（p. 508）と講義する Hearn に，やはり木村は膝を打ったことであろう．[14]

同様に【2641】でも，*Life and Literature* ちゅうの“Tolstoy's Theory of Art”に Hearn が「大文藝は是非共道德的意義を持つたものではなくてはならないと斷じ，その道德とは，讀者に高尚な情熱を吹きこみ，愛——自らを犠牲として省みない獻身的精神を焚きこむ類のものだと説別」（p. 239）するのを読んだ木村は，数年前に自ら邦訳していた【2271】すなわち『藝術とは何ぞや』のおそらく第 15 章を踏まえて，Tolstoy が「藝術の普遍性を主張して，それが作者と讀者（若しくは聽者觀者）を結び付けるばかりでなく，同じ感銘をその藝術から享受した人と人とを結び付ける事を説いた點丈けでも，動かすことの出來ない價値」（p. 273）があると【2492】で咀嚼していた考え方にも通じるのを実感したであろう．

それゆえに，S. P. B. Mais の著書 *Books and Their Writers*（1920）に *Interpretations* を取り上げた“Lafcadio Hearn”（原著 pp. 242－276）を読んで，その要約を【2151】にも紹介した際に，Mais が Hearn 独特の「閃きを集めてそ

[14] 思索的な論説文ではなく文芸に偏して教えたために Hearn は帝国大学を追われたとの風評があったことを，漱石の『英文學形式論』（1924）の序で皆川正禧がほのめかしている．持ち前の反骨精神と判官贔屓の気風とを刺戟されて，木村の Hearn への共感は大いに拍車を掛けられたことであろう．

の背後に批評家としての先生の根本的態度を纏めて」いないことに不満を感じたくらいであるから，英語圏のなまじな研究者よりは木村のほうが講義録を読み込んでいたのであろう．こうしたHearnとの一体感に支えられたればこそ，彼は1920年頃から『文章倶楽部』（新潮社）に「文芸講話」を担当し，Hearnの文学講義を「反復愛読し…それから材料をもとめ」（【7991】p. 227）ることによって10年近くも執筆を続けられたのである．

そうした学びの積み重ねから，【5251】でのような，「日本は，彼のような繊細な敏感な心，彼のような美しきペンの解説者を，再びもつことは六ヶ敷いであろう．大学のプロフェッサァとしても優秀で，彼のように英米文学の細かなニユアンスまで，日本人の胸にしみこむように説き得た教師は他にない．」（pp. 28－29）とするほどの称賛の念が沸き上がったのであろう．だからこそ，彼がHearnに異を唱える場合はむしろ珍しくて，Whitmanの影響を日本の英文学者に警告したHearnの意図は解らないとか（【55Z1】pp. 163－165），「ヘルンは他の詩人には寛容なくせに，ホイットマンに対してだけは若いときから過酷である．」（【6051】p. 530）といった感想くらいしか，抗弁らしき例を見たことがない．いずれにもせよ，心酔していたHearnに由来する木村の所説では両者が渾然一体となってしまって，Hearnの揮っていた「文藝が國際的に働く力」の実例を木村の文章のなかに見極めて色分けすることは，専門家でもなかなかに困難であろう．

第3章　英国詩人たちへの関心

英文学史上の詩人で木村が親しんだ最も時代のふるい詩人は，11歳のときに『世界三十六文豪』で知った**William Shakespeare**（**1564—1616**）であった．それで，高等小学校の四年生（13歳）になって担任からCharles Lambの

Tales from Shakespeare（1807）で読み聞かされた時も，それが *The Merchant of Venice* の梗概であると判ったらしい．坪内逍遙の名前も尋常科三年と四年の教科書『國語讀本』の編者として知っていたから，また小兄にも刺戟されて，彼は小学生のうちから「坪内博士のシエークスピヤの講義に心酔し切つてゐた」（【2641】p. 120）らしい．そんな下地もあって，早稲田で坪内逍遙の講ずる *Julius Caesar* を聴いたときには，「さすが有名なものだけに，じつに感心した．これによって，今まで会得できなかった英語の解き方，読み方まで，だいぶ分かってきた」（【7991】p. 130）と，感激するほど喜んだのである．

日本一の師に恵まれた木村は[15]，卒業してからも坪内訳と C. T. Onions の *Shakespeare Glossary*（1911）や Kenneth Deighton や市河三喜による注釈を座右に Shakespeare 作品との付き合いを拡げていった．すなわち Julius Caesar に続いて，【2091】になると *Romeo and Juliet, Antony and Cleopatra, Hamlet, Othello* が挙げられている．【25X1】では *Macbeth* と *Tempest* が加わり，【3452】で *King Lear* と *Timon of Athens* と続き，【34Y1】からも *As You Like It* に親しんだことが判る．それに，観劇する機会があれば，「いつでもラムのテールズを一讀して，その筋を頭に入れて」出掛けるようにしていた．London の劇場に女性同伴で *As You Like It* を観に行った際なぞは原文を持ち込んで，彼女たちが笑い転げる度に台詞に印を付けておいて後日改めて自分でも可笑しがろうとしたくらい，Shakespeare を理解しようと健気に励んだものであった．

その後 *The Winter's Tale* が【4981】で加えられたが，歴史劇は挙がっていないことが判る．それについては【35X1】が示唆的で，「私は坪内先生に向つて，どうも沙翁の史劇と云ふものは面白くない」と云つた事があり，そしたら逍遙は「それは英國史を知らんからだらう．その心得があつて讀むと面白い．

[15] 蛇足ながら【3611】（pp. 143－190）において，「英語のできない坪内」とか，逍遙が「遊郭に浩然の氣を養つた」といった，いかにも木村らしい，意表を衝いた pen portrait に接することができる．

殊にフォルスタッフの如きは獨特の面白さがある.」と蒙を啓いてくれたそうである（pp. 144－145）．それでも【6911】では，「邦訳があれば，それと対照して読むのが，一ばん語学の力をつける道だと思うようになり，シェークスピアは，…早稲田を卒業してから博士の訳書と対照し，諸注を参酌して，三十冊ぐらい読んだ.」というのだから，Shakespeare との付き合いでは並の英文学研究者以上に年季が入っていたようである．

木村がそこまで Shakespeare に惹かれた理由については，【33X1】から察するに，「ハムレットでも，オセロでも精練せられた智識階級の興味を惹くと共に，十分に讀み書きの出來ないやうな人間に取つてもやはり面白く觀られる」（p. 274）という，（後述する近代小説発生に関わる木村の説にも通ずる）庶民的視点と感覚に照らしながらの評価があったようだ．それに【3453】でもそうなのであるが，木村流の明治文化研究においても，「第一は創作の上に，第二は生活の上に，第三は随筆の上に，シエークスピアが，明治文學に對して如何なる影響を與へてゐるか」（p. 171）を考察する対象としての興味からも，Shakespeare には惹かれていたのであろう．

木村が何度か言及した英国詩人を拾い集めていくうちに，Shakespeare の他にも 15 名ほどを筆者は数えてきたが，引用はされても作品への思いが必ずしも伝わってはこないような言及もあったりするので，さらに対象を絞って木村の関心の所在について話題にしてみたい．

生年順に Milton, Marvell, Gray と並べて，**William Cowper**（**1731—1800**）まで下ると，木村とこの詩人との初めての接触が【5651】（pp. 12－14）を通して判る．すなわち尋常三年の教科書『國語讀本』に読んだ「郵便箱の歌」が愉快で忘れられずにいた．ところが 15 年後に，【75X1】によると，*Interpretations* ちゅうの“Notes on Cowper”で Hearn が *The Task*（1785）を講じて「神往き，魂動く」（p. 35）解説（原著 pp. 41－42）をしていたのを発見した木村は，

大いに驚愕させられたのである．『英詩文評釋』（1902）で戯作歌“John Gilpin”（1782）を評釈したほどCowper好きであった坪内が，『國語讀本』の「郵便箱の歌」に *The Task* を転用したと確信できたからであり，更に着眼の先も「郵便箱の歌」とHearnとが同じ箇所で驚かされたからであった．そのときの興奮が「私の比較文学的関心への開眼」（p. 38）になったというのであるから，Cowperとの出遭いは木村にとって特筆に価する出来事であったといえる．

やはり坪内が，今度は『英文學史』（1901）で「シェークスピア以降稀に見る所の劇詩的神筆」（原著 p. 442）を揮う者と称したScotlandの民衆詩人**Robert Burns**（**1759—96**）による“The Jolly Beggars”（1785）は，【7831】にしか言及されていないようであるが，203行というBurnsにしては「長篇なる上，若干戯曲的手法を用いているのが珍しい」うえに，北原白秋の小唄集に通ずるところもあって，非常に木村の好みに適ったものだから，彼が（フェビヤン協会員として）演壇に立つ度毎に，好んでこの「愉快な乞食」の話を聴衆に向かって語ったらしい．

英ロマン派の詩人のうち，Scott，Coleridge，Shelley，Keatsなど主だった顔触れへの言及も散見されるが，情味深く語られてきたのは**William Wordsworth**（**1770—1850**）とByronであった．先ず前者であるが，【2512】によると，Wordsworthには渡仏先の恋人Marie Anne Vallonに生ませた娘がいて，帰英後も娘の養育費を送り続けたというエピソードを「ロマンチックな熱心さ」で描き出した伝記小説『詩人の若き頃』（原題不明）を木村は好感を覚えながら読んだらしい．また【5651】（pp. 85－112）は，「どんな機縁が，ワァーヅワースをそうまで親しく，私に結びつけたか」について，14歳のときに遡って回顧している．すなわち，幼少から野鳥観察を愉しんで育った木村少年は，愛読する国木田独歩の『春の鳥』に示唆された「有名な詩人の詩」の原詩が何であるのかが気に掛かっていたそうである．長じてから逍遙による『英詩文評釋』にその答えを見出し，併載された“To the Cuckoo”や“Ode on Intima-

tions of Immortality from Recollections of Early Childhood”についての評釈が「嚙んでふくめるように，その詩の味わい方を説いている」（【6921】p. 112）のが更に彼をこの詩人に引き寄せた．逍遙は当時まだ現役でWordsworthを講義していたらしく，「英語をまなんでいる文学青年たちは，あらそうて，その原詩をよもうとしたので，独歩は，その注釈書まで出し」（p. 112）たほど盛んであったから，木村も学生時代からWordsworthに親しむようになっていた．

卒業してからも相変わらずにWordsworthには親近感を抱き続けたようで，1930年頃に入手していらい座右にしていた「マクミラン発行の，マシュー・アーノルドが選をしたので名高いワァーヅワースの詩集」（p. 87）は，四半世紀の間に書き込みで一杯になってしまったと【5651】で愛惜しんでいる．そうしたヴァーチャルな親交の賜物であろうか，【4981】ちゅうの「人と氣分と目的と」（pp. 166－175）では，ジャーナリストらしい着眼でWordsworthを語っていて，「同じ題材も，それをかく人の素質によつて，あるいは無味乾燥の散文となり，あるいは又高潮の詩となる」ことの好例として，完成された詩“Daffodils”を，凡々たる女性Dorothyが残した随行記*Journals*（1897）の関連箇所に対照させて，なるほど兄は詩人の素質に恵まれていたとの実証を試みている．更に後年の【75X1】でも，Dorothyが「自然を見る眼は詳細で精細に富む」ので，「兄の詩の絶好の補足，無二の註釈をなしている」（p. 113）というメリットを再認識して，両文献を取り合わせにした読み方を愉しんでいる．

更に【2661】では，上田敏訳から12行を引用して，「牧歌的文藝が人の死を悼む哀歌と交つたものはミルトンの『リシダス』に最も美しき例を發見」できることに思いを致してから，英文学では18世紀に顧みられなくなったこの牧歌的空想を産業革命後になってから復活させた功績者が他ならぬWordsworthであったことを木村は指摘してくれている．

文学好きの小兄に感化されて12歳このかた早稲田を目指し，入学したら「讀

まねばならぬ」（【2641】p. 117）と思い定めてきたはずの **George Gordon Byron（1788—1824）**とは，鷗外，透谷，漱石の Byron 評は読んできたものの，早稲田に在学中は向き合わず仕舞いになってしまったようである．ところが 1921 年に発表した「天才と道徳的缺陥」（【2641】に再録）において，Byron が英国から放逐されたのは背徳的評判だけが理由で，本来の「詩歌の方になると全篇の底を貫くものは凡て此の生來の高貴性で，それは實に讀者の魂を震撼させないではおかない．之を要するに人間の生活力はほゞ一定して居る．若し一方に非常に卓越し，傑出して來れば，他方には必ず缺陥が生じて來なければならない．」（p. 245）という解釈を提示して，Byron の擁護と再評価を試みていた．ちょうど 1924 年が Byron 没後 100 年であったこともあり，【2512】では視点を欧州大陸のそれに移して，Byron をむしろ抑圧された人民の解放に尽力して「作家としてよりも人として偉い」恩人であったとする「國際的評価」のほうが優勢に傾きつつあり，従来は冷淡な評価をしていた英本国のほうから摺り寄り始めている徴候を，新着の Byron 関連書を読みながら報告している．ということで，12 歳以来の「讀まねばならぬ」という Byron への思いは，15 年ほど遅れて満たされることになったようである．

渡英した 1928 年に，木村は欧米での伝記小説流行の気配を感じ取り，André Maurois が Shelley の伝記を描いた *Ariel*（フランス語版 1923, 英訳 1924）を「一讀して，すつかりそれに魅せられ」（【4871】p. 179）てしまい，Maurois 式の「傳記小説と云ふ形式は非常に私の嗜好に適する」（【3531】序）ことを発見し，それからというものは木村流人物伝において多用される手法となった．その後，Maurois の *Byron*（1930）に小国の自由独立という義にすべてを献げた英雄像を読んだことから，彼は【3531】としてこの大作を苦労しながら邦訳することになったのである．訳書の「序」には，

本當にバイロンに堪能しようと思へば，その傳記をよみ，文學史をよみ，又

> その詩を讀破し，更にその詩と，バイロンの閲歴性向と，時勢とを比較考量して，鑑賞し，思念せねばならない．それは特別な研究家でない限り出來ることでない．だが此の書を讀めばたつた一册で，バイロンは腹一ぱいになる．

と，木村は期待を込めて書いているが，これはByronに限らず，作家に向き合おうとする際に研究家としての彼が（おそらく生涯を通して）踏んできた手順を凝縮した一文でもあろうから，先鋭化された手法で視野を狭めてしまった現代の文学研究が立ち戻るべき原点を思い出させてくれよう．なお【3611】にも，Maurois に倣って，木村のイメージする Byron 像を描いた伝記的小品「バイロン」（pp. 220－250）が収められているが，それ以後に彼が Byron に言及した文章の存在を筆者は知らない．

木村が関心を示した英国詩人のうちで最も時代を下った辺りに活躍したのが，ヴィクトリア朝の **Alfred Tennyson**（**1809—92**）と Browning であった．前者との出会いについては【75X1】ちゅうの「アーサー王物語」（pp. 65－70），「シャロット姫」（pp. 70－73），「テニソン」（pp. 73－77）から窺われる．すなわち，予科時代に「幻影の盾」（1905）や「薤露行」（1905）を読んだところ，彼が少年時代に箕作元八の「アーサー王物語」から仕入れていた「私のもつアーサー王の極めてわずかの知識に，更に肉薄して接近してくるものがあるのを覚えた」（p. 67）らしい．そうした感動から，漱石が準拠したという，近代外国詩人のなかでも当時の日本に知られていた Tennyson による雄篇 *Idylls of the King*（1859）の存在を知るようになった．しかも予科では片上から“Lotos-Eaters”を教わっており，「しょっぱなからテニソンにぶつかり，すっかり嬉しくなってしまった」（p. 68）という巡り逢わせもあった．あるいは逍遙の講義録『英詩文評釈』を「熱心に読んだ．…嬉しいことに私はここで又テニソンにであったのだ．…まず最初の「シャロット妖姫」から読みにかかって，私は思わず狂喜に近い叫びを発しそうであった．」（p. 69）というふうに，彼

の感受性に訴える機会が重なった.【75X1】でも漱石と Tennyson とが読み比べられているように，彼にとっての Tennyson への関心は，主として Arthur 王伝説と漱石の醸す中世的雰囲気とが混ざりながら昂まったようだ.

最後は **Robert Browning**（**1812—89**）であるが，切っ掛けはやはり漱石だったようで，やはり【75X1】によれば，『吾輩は猫である』（1905－07）から「アンドレア・デル・サルトという画家の名を知り，程へてブラウニングにこの題の詩のあるのを発見して，漱石がこれからあの作の感興を得てきたに違いないことが推測されて，云うべからざる興趣を覚えた.」（p. 60）らしい．しかも“Andrea del Sarto”は，*Men and Women*（1855）ちゅうの一篇で 267 行しかないが，かつて画家を志したこともあった木村であったから，この作品を通して Browning には一層の親近感を覚えたであろう.

Browning への言及を拾い集めてみると，【2492】【24Z1】【2511】【25X1】【2641】【2861】【4981】【5651】【56Y1】【6671】【6911】【75X1】と諸処に見られる. なかでも彼がこの詩人を見据えた文章は 1920 年代に多く，とりわけ【2641】（pp. 76－116）と【2511】（pp. 288－296）には彼が抱いた関心の強さが窺える.

先ず【2641】での Browning 論であるが，「抒情詩人として」（pp. 76－85）の節では，何点かの所蔵書のうち W. L. Phelps 著 *Robert Browning : How to Know Him*（1915）が「英米文藝批評家の通弊とする「英米に偏する」の嫌ひが最も少い」（p. 76）との理由で初学者が概観を得やすい参考書であると薦めている．そしてそれに準拠して執筆したことを明かす．また抒情詩人としての位置付けにも触れていて，長詩に挿入された抒情的部分や随所に見られる詩句には卓越した手腕を認められるが，Browning は最高ランクの抒情詩人ではないと判定する．Browning が「人間の魂，人間の心に向つて，深刻な精緻な奥妙なスタデイを試みる事に餘りに熱心であつたゝめ，單に偕調の美のみを樂しむ抒情詩の制作に專らなる事が出來なかつたのである.」（p. 78）と彼なりの説明を与えてから，上田敏が訳した“Pippa Passes”（1841）と“Prologue”（1878）

の一部を，また“Home-Thoughts”（1845）は木村訳で引用して，それらが如何に叙情的であるかを実感させてくれる（pp. 80－85）．あるいは【2861】によると，木村はこの頃に Henry Jones 著 *Browning as a Philosophical and Religious Teacher*（1891）も読んでいて，Browning が「愛」という主題について「獨創性ある者にして初めて可能なる清新さと直觀を以て之に接觸した」（p. 10）詩人であったとも解釈する．

同じ【2641】の「劇的抒情詩人として」（pp. 86－100）の節では，Browning の本領はむしろ劇的独白のほうにあると唱え，Phelps の第 IV 章“Dramatic Lyrics”（原著 pp. 54－96）から，詩人が「構造に於ては抒情詩の形式を取る．たゞ，その取材に於て劇的」（p. 91）な dramatic lyric という詩形を愛好したことを原著の pp. 54－67 に沿って読み進める．また思想については，「詩人は必ずしも思想を作り出す必要はない．寧ろその思想の映像（image）を創造しなければならぬ．」（p. 94）という Phelps のスタンスを木村も支持する．そして彼は Phelps が Browning に指摘した 4 つ根本思想のうち男女の親和力（affinities）に限定して Phelps の説を読み解いてくれる．

【2641】の「パラドックスの詩人（ブラウニングの一面）」（pp. 101－116）でも Phelps を用い，第 VI 章“Poems of Paradox”（原著 pp. 141－171）から pp. 142－154 を咀嚼しており，Browning に paradox を用いた詩が多いという現象に注目し，「叛逆的な，排常識的な見解を下すことは，彼が心から愛した所であつた．と云ふよりも寧ろ，彼の心の一面的本質であつた．」（p. 103）との認識のもとに，詩人が“The Glove”（1845）で詠んだ反証的下りをめぐって，「ドストーエフスキが小説に於て占めてゐる地位を，詩壇で占める者はブラウニングではあるまいか」（p. 108）という印象を得ている．彼自身「愛誦して措かない」ところの“A Grammarian's Funeral”（1855）にしても，Browning が文法学者の臨終の場面で「魯鈍な，それでゐて氣位ばかり高い，面白味のない學究…から愛敬すべき性格を創造」（p. 109）した意外性，あるいは

【2492】のいう「眞理に忠實な人の魂」(p. 149) をこの詩に描き出した詩人の手腕には目を見張らされる思いに駆られて，彼が「好きで堪らない」12 行を【2641】(p. 113) に披露している．

また【6921】によると，増田藤之助は「詩を愛好し，早稲田では詩をおしえ，私はブラウニングの「指輪と書巻」をならって，難解なのに苦しんだが，おかげでブラウニングずきになって，その詩集を終生の友とするようになった．」(p. 144) そうである．[16] *The Ring and the Book* (1868－69) は全 12 巻 21, 134 行からなる大作で難解とされていたから，【6911】では「歯がたたず，上田敏，野口米次郎，帆足理一郎，畔上賢造などの諸家の訳と対照した」ことを明かしている．読破したのは 1920 年代前半と想像されるが，それだけに受けた影響も大きかったはずで，【2511】は *The Ring and the Book* 全巻の概要を読む者を誘い込む筆遣いで描き出して[17]，注目すべきは「この詩に語られた事件でもなく，最後に與へられた結論でもない．十二の視點を通して一つの事件を見た作の結構である．」(p. 295) と，Browning の創造した dramatic monologue (劇的独白) という手法で展開される「法廷的配置」であることを指摘している．こうした手法は『藪の中』(1922) を思い起こさせることから，木村は芥川龍之介に関連性を問い合わせていたようで，Browning の影響を認めた返信も受け取っており，しかし全集には未収録ということで，その文面が【5651】(p. 192) に引用されている．

この大作を読み通した実績と自信が支えとなってか，【2861】では，「私は詩に鈍感だから外國の作品の聲調を味ふなぞと云ふ大それた望みを起こした事はかつてない．難解だと言はるゝブラウニングを外の詩人に比すれば比較的多少でも多く手がけてゐるのは，彼には聲調の美を全く無視しても，別に私の心を

[16] 【24Z1】によると，三年生で増田による「一部分の講義を聞いた」が，余りの難しさに抛り出してしまい，卒業後に Hearn の *Interpretations* に触発されて通読を決意した．
[17] この部分を以前に『文章倶楽部』に発表したと木村は添え書きしているが，未確認．

充たしてくれる豊富な内容があるからである．でブラウニングの事なら，大凡の見當はつく」（p. 12）という，これも並の英文学者を超える愛好振りが表明されている．

その後の（およびそれ以外の）時代の英国詩人たちについては，言及されてもほとんどが単発的に名前が挙がるていどであった．木村の側に好悪もあったろうし，現代に近い詩人たちの評価がまだ定まっていなかった状況もあったろう．そうしたなかで，詩人 **Francis Thompson**（**1859—1907**）[18] の無名時代を描いた伝記短篇小説「天国をあさる者」（1929?）に触れた【36X1】（pp. 111－116）が筆者（藤井）の印象を残ったが，木村の関心は比較的マイナーであった Thompson という詩人や彼の詩よりも，この伝記的作品に向けられたか，あるいは著者であるベッチイ・グレーヴス（Betty Graves?）という作家のほうにあった可能性も考えられるであろう．

第 4 章　英国小説家たちへの関心

英国小説研究に対する木村の認識は【2861】所載の「『小説神髄』小論」（pp. 72－86）にほぼ集約されている．欧米でもぼつぼつ Walter Beasant（1884），Henry James（1888），F. M. Crawford（1893）による小説論が試みられ始めた頃に，坪内逍遙は限られた参考書を頼りに『小説神髄』（1885－86）を執筆していた．坪内は勧善懲悪的な中世のロマンスから人生を客観的に描写する小説へと段階的に変化してきたと唱えていが，木村は H. A. Taine（1872－74），W. J. Long（1909），W. H. Hudson（1913）たちの英文学史に散見された見解を参考にして，「近代小説が十八世紀になつて，ブルジヨアが貴族に反抗

[18] 研究社英米文學評傳叢書（全 103 冊）の一巻（1937）がこの詩人に宛てられている．

して起ると共に，創始せられた文藝上の新形式」（p. 72）であって，平民の理想である個人主義の意識が解き放たれたことから，Richardson が *Pamela*（1740）という近代小説を誕生させたと因果付けて，【7991】の言い分では，「日本にはいまだ嘗て吐かれたことのない斬新な」（p. 306）唯物史観的小説発生論を唱えるに至った由である.[19]

また，小説論研究の第二期には Bliss Perry の *A Study of Prose Fiction*（1902），第三期に Clayton Hamilton の *A Manual of the Art of Fiction*（1918）を見据えて，木村はそれらを突き合わせて「坪内博士の『小説神髄』とはなかり詳細に讀み較べてみた．且つ或る必要から『小説神髄』が近代小説論の諸條件をどの程度迄具備し，どの程度缺いてゐるかを見るため，三著の内容項目の表まで作つた」（【2861】p. 84）らしい．そしてその比較から，創作における視点の研究と形態としての短篇小説の研究が坪内から抜け落ちている不備に彼は気付くに至った.[20]

後の【7991】によると，最初『文章倶楽部』に発表して【22X1】に再録された小説論を執筆した際に，木村は **Arnold Bennett**（**1867—1931**）の *Literary Taste*（1910）と *Author's Craft*（1914）を利用して，「年少読者をよろこばせ」ていた実績があったらしい（pp. 226－227）．谷沢（1977）が「日本最初の体系的包括的な近代小説の理論的研究書」として高く評した【2511】すなわち『小説研究十六講』は，18 歳頃の松本清張に「あれを読んでいて，おれでも小説が書ける」（p. 318）と奮い立たせた実績のある小説創作論でもあった．木村も「畢生の大作と自ら考えて」（p. 294）いた名著なのであるが，そのうちの第四講～第十五講は概ね Hamilton に沿っていたらしいので（p. 275），木村の小説論の骨格を上述の文献が提供していたと考えてよいであろう．

---

[19] 着想の初めは【2491】「小説發生の階級的考察」で，【2492】【2511】に繰り返された．
[20] 【2492】【2511】【3341】【33X1】【4871】等の小説論で木村は繰り返して論じている．

当の英国小説家や作品について，木村の好みはどのようであったろうか．韻文にも況して散文では英訳が盛んに（そして日本語化も追いかけるように）行われていたから，英訳を好んで読んだ木村の意識では英国文学も大陸由来の文学も峻別されていなかったかもしれない．対象が彼の好きな大衆文学に拡げられたら尚更のこと，原作品の国籍の問題なぞは面白さの前で雲散霧消したであろう．それでも文章上で言及が繰り返されれば，それは彼にとって馴染みある作家であり作品であると解せるのであるが，ここでは敢えて英国小説に関わる固有名詞を選別して，（筆者の本稿における関心である）英文学における彼の好みを時系列を意識しながら探ってみよう．

【2511】の第一講では **Samuel Richardson**（**1689—1761**）の作風と *Pamela*（1740）の設定に触れられている．Richardson の略歴については【2641】の「近代小説の發見」（pp. 169－179）が紹介している．【2631】では，物語がプロットの上に展開されたからこそ *Pamela* が小説の第 1 号たる資格を獲得したと確認し，その梗概を示している．また彼は，女主人公が描かれたことも平等の精神が女性にも及んだ証として歓迎するが，「退屈で，今日の讀者には到底讀み終へるだけの根氣ある者は多くあるまい」し，況してや「日本譯などの到底出る見込みのない」作品なので，せめて原作の面影を伝えるためとして，正続 2 冊ある Everyman's Library 版の第 1 冊目から pp. 342－344 を忠実訳する．それでも *Pamela* は，【2091】が挙げていた（100 万 words ある）*Clarissa*（1747－48）に比べれば，退屈なほどに冗長とは言えないから，両作品について彼は請け売りの印象で済ませていたのであろう．

Richardson を筆頭にした初期英国小説の "The Four Wheels of The Novel Wain"[21] のうち，Henry Fielding については「夏目漱石氏もどこかで愛讀書の一つに數へて居られた作家である．」（【2492】p. 26）と触れるのみで，Tobias

[21] George Saintsbury が *The English Novel*（1913）で英国小説創成に重要な貢献を果たした 4 人の作家に用いた呼称．

Smollett には無関心であり，Laurence Sterne では *Tristram Shandy*（1760－67）について，【2641】で，「實を言ふと，この小説は私も讀んでゐない」（p. 176）と断ってから，漱石の評論「トリストラム・シャンデー」（1897）を利用して作品の奇抜さを紹介するに留まっている．（本論考の第 6 章で触れるが）木村は英訳であれ邦訳であれ翻訳に頼ることを後ろめたく思わなかったから，これらの邦訳が登場していたならば，論評するにもずっと実質が伴ったことであろう．[22]

読み難い英語表現が幅を利かせていた 18 世紀英文学は文法の苦手な木村の好みでなかったかもしれないが，**Daniel Defoe**（**1660—1731**）が書いた小説第 0 号たる *Robinson Crusoe*（1719）に限っては，言及が【2642】【2861】【4871】【72X1】【75X1】に散見される．Defoe の英語が読み易いこともあったが，【35X1】によると，「私は，いつでもわが國と西洋との接觸面に興味をもつ．多少でもそんな關係のない材料は，多分書いた事は無いやうな氣がする．」（p. 90）と，明確な目的意識を持って執筆してきた木村であったから，この作品には歴史的興味も覚えたはずである．彼は【2861】でこれを解題して，幕府がぐらつき始めた嘉永・安政年間（1848～59 年）に邦訳された *Crusoe* を，「文藝の封建的荒唐から近代的現實へ，叙事詩より詳説へ，集團的題材から個人的題材への推移の中間に係る一大紀年標」（pp. 62－63）と位置付けて注目している．更に【75X1】ちゅうの「ロビンソン・クルーソー移入考」（pp. 295－303）では，原話となった Alexander Selkirk の航海記（1712）が明治 30 年には邦訳されていたという驚くべき事実をも教えてくれている．

このまま時代を下れば，論述が 19 世紀の小説家に進むところではあるが，その前に 17～18 世紀の散文作品に彼が示した関心について少し触れておこう．学生時代に『三四郎』を読んで *Hydriotaphia*（1658）という作品名を知った彼

[22] 翻訳超大国の日本では，現在四人組の主要作品が *Clarissa* も含めて訳出されている．

は，一部を【2511】に引用しており，その著者 **Thomas Browne**（**1605—82**）について坪内の『英文學史』や Hearn の *Interpretations* から教えられた時の喜びを【6671】と【75X1】（pp. 465－467）に記している．また，彼が駆け出しの頃から西欧文化に関わる情報源としてきた *Harvard Classics* 叢書に，Bliss Perry の“Criticism and the Essay”（*Lectures*，1914，pp. 239－253）を読んで，エッセイ文学について【2641】の pp. 191－200 で語っており，漱石の『文学評論』から Joseph Addison や Richard Steele 論も参照するなど，漱石への傾倒振りがここにも窺えてくる.[23]

木村が読んだとは想像し難い **Samuel Johnson**（**1709—84**）についても，【3451】には「學問知識と常識と，剛毅な精神力をもつて…文學者の社會的地位を全般的に高めたのであつた.」（pp. 51－52）と言及しているが，英文学史での常套句でしかない．それでも【2642】では，James Boswell の *The Life of Samuel Johnson*（1791）触れて，「この價値については私も夙に諸書に於て知り，一本は座右に備へる事久しいが，やはり未だ讀んでゐない事を恥づる」（p. 286）と断っているところは，英文科出身者であれば無視できない両大物に親しんでいないことへの引け目が垣間見られて微笑ましい．それが【4871】になると，「端役の觀點」（p. 136）が効果を挙げている例としてこの伝記を引き合いに出しているからには，その後に読む機会を得たのであろう.[24]

論述を英国小説に戻すと，木村は主として 19 世紀の作品に親しんだようである．早稲田に入った年に，偶々 *The Lay of the Last Minstrel*（1805）という物語詩を読んだところ，「冷やかし半分の気もちであったが，しかし私はそこに十分の詩味をおぼえた」（【7991】p. 384）とあるように，Scotland の文人

[23]【8051】によると，1969 年に木村は，夫妻で「イギリスでは夏目漱石と島村抱月の止宿した先を虱つぶしに歴訪」したということである.
[24] 神吉三郎譯『サミュエル・ヂョンスン傳』（岩波文庫）全 3 冊が 1948 年 1 月に完結.

Walter Scott（**1771—1832**）を意識するようになり，大学二年生では歴史小説 *Ivanhoe*（1819）を「六か敷さに手こずりながら，読了したのが，私がスコットの妙味を識った」（p. 10）初めであると【7731】にあった．また【6441】が語るには，明治 10 年頃に坪内が，高田早苗（後の早稲田大学総長）から Waverley Novels の面白さを教えられ，明治 13 年（1880）に *The Bride of Lammermoor*（1819）を滝沢馬琴の平仮名文体で試訳して橘顕三の名義で『春風情話』として出版したことがあった．[25] それを木村の親友柳田泉（後に早稲田大学教授）が掘り出してきて，坪内に「じつはそれは私の学生時代の手すさびだった」（p. 59）と認めさせたこともあったらしいから，早稲田の英文科にはもともと Scott に親しむ気風があったのであろう，そうしたなかでの読破だったかもしれない．

そうした伝統の末端に連なると自覚したであろう木村は，Scott の小説をどう読んだのか．【33X1】が，プロット，人物，背景の扱いでは「詩の物語なる『マアミオン』（*Marmion*）や『湖上の佳人』（*The Lady of the Lake*）を描いたのと少しも變わらぬ態度で，散文物語なる『ウェバレイ小説叢書』を創作してゐる．…いづれの場合に於ても中心の目的は同一で，『アイバンホウ』（*Ivanhoe*）は fiction であるが，『マアミオン』はさうでないなどと斷ずる批評的根據は，到底あり得るものでない．」（pp. 253－254）と言い切っていることから，Scott の「詩味」と「妙味」は彼において渾然一体を為していたことになる．

【33Z1】の第五講「歴史小説の誕生」になると，Scott が「英蘇國境の古譚，傳説，歌謡を，丹念に蒐集し」（p. 126），そうした「枯骨に魂を吹きこんで，この世に甦らせ，讀者をその間に伍してゐるかのやうに感じさせ」（p. 127）る創作法で，（第四講でも触れた）中世のロマンス詩の伝統を復活させ歴史小説

[25]【7871】によると，先輩であった小川為次郎に文体の欠陥を指摘された坪内は，「馬琴を否定する『小説神髄』を世に送って，ここに明治文学の新世が開ける」（p. 28）機縁を創った．なお，『小説神髄』には Scott の名が散見される．

という新分野を創始したScottの功績に彼は注目する．歴史小説が「大衆文學のために，汲んで，盡きせぬ靈感の源泉」（p. 120）を提供すると考えたからである．こうした史観は，Hearnの*A History of English Literature*に収められた“Pre-Victorian Prose”や“Pre-Victorian Poets”に由来していて，木村の創見とは言えないが，Scottの存在は彼のイメージする大衆文学史には必須であった．だからというわけでもなかろうが，彼が綴ったScottの小伝には，12歳のWalterが親友のJames Ballantyne（後に出版業者）に向かって「おい，ジヤミ公…」（p. 122）と，浪花節調で呼び掛ける寛いだシーンがある．

木村とScottとの作品を通した親交は最晩年の論考【7731】にまで続いており，Scotland方言の訛が強いために従来敬遠されてきた*Rob Roy*（1817）を読破したことを木村は報告している．「まことに予想外に面白い，出来のいい小説であり，且つ大作で，イギリス文学史上に，永く光輝を放つであろう」（p. 24）と深く感銘するとともに，高田早苗が明治11年頃に読んだのに次いで自分が二番目の日本人読者であろうと得意がっている．卒業のときには，「私は早稲田派という学歴を利用せず，少なくとも意識的にはそれを避け…大学の卒業免状を学校に送り返して，その校友たり，その資格をもつことを辞退すると申し送った．」（【7991】p. 375）ほどの反骨漢も，半世紀以上にわたって文筆活動を続けるうちに早稲田との関わりも深まってきて，そろそろScott読破の実績を介して母校や母校の大先輩との絆を実感してみたくなったのであろう．

William Harrison Ainsworth（**1805—82**）による作品のうち*The Tower of London*（1840）は，Scottの流れを汲む歴史小説でありながら，類型的な人物描写が大衆文学らしい風味を添えているために今日も多少は読まれるし，英文学史でも一定の評価を保持している．とりわけ日本にあっては，漱石にインスピレーションを与えて『倫敦塔』（1905）を執筆させた作品として知られている．【33Z1】によると，彼は漱石の『倫敦塔』を少年の頃から愛読していたので，漱石が種本にしたという当時の評判作も読んでみて，「これに關する幼稚

な考證を雜誌に書いた事さへある」(p. 318) と第十二講で明かしている (第十一講の後半がその考證であろう). なにしろ Ainsworth を耽読したときの木村は「愴然として思はず肌の寒きを覺ゆるやうな氣がした」(【2492】p. 206) くらいであったから, 渡英した 1928〜29 年には, 漱石が Tower の門上に想像した Dante からの 6 行を木村も思い起こしながら,「私ほど度々, あそこに足を踏んだ者は例がないかも知れない」(【75X1】p. 202) と, ことのほか懐かしんでいる. であればこそ, 1929 年夏に Manchester 入りしたときにも彼は真っ先に Ainsworth の家に詣でたそうである (【3121】pp. 232 − 233).

歴史小説の流れには片足を爪先くらいしか浸していない **Charles John Huffham Dickens** (**1812—70**) であったが, 間の悪いことに,【2492】当時の Dickens 人気は本場英国で凋落期にあった. 日本でもほとんど注目されていなかった. そうした流行り廃りに影響されてか, 木村は Scott や Ainsworth に覚えたほどの魅力を Dickens には感じなかったようである. *Oliver Twist* (1838) は歩哨に立ちながら読破していたし, 親友の柳田泉が 1928 年に邦訳を出版していた *Hard Times* (1854) は読んでいたであろう. しかし【2492】では, *David Copperfield* (1850) と *A Tale of Two Cities* (1859) を好奇心と観察力の所産であり傑作であると持ち上げておきながら, 内容に踏み込んだ言及をしていない. 【33Z1】の第七講で言及された *Bleak House* (1853) や *Edwin Drood* (1870) に至っては, 読んだうえでの言及であったとは思えない. 詰まるところ彼の見た Dickens は【2492】で示された評価に尽きている. すなわち,「トルストイは『藝術とは何ぞや』の中で, ユーゴーやドストエーフスキイと共に彼の名を並べその作品を世界第一流だと賞揚してゐる」(p. 31) が,「あのトリビアルな瑣事にあゝ迄氣を奪はれないでゐたら, 藝術家としては更に傑れたものになつたらう」(p. 35) という, 突き放すような冷めた評価に尽きていた. もしも当時に今日のように邦訳が完備されていたならば, 速読が自慢の木村のことであるから,「トリビアルな瑣事」なぞは物ともせずに Dickens の大長篇を片端

から読破して，そこに横溢する物語性を通して文学の香り豊かな大衆文学を愉しめていたのではなかろうか.

次は **Edward George Bulwer-Lytton**（**1803—73**）であるが，【7871】に表明された木村流の文化史観では，西洋と異質な日本文化の水準を明治時代に世界レベルまで引き上げた要因は西洋の小説を翻訳してきたことであり，翻訳することによって日本語は「文体から日常用語にまで，改革と，清新化と，多彩と豊富と」（p. 11）を実現させ，延いては明治文壇を成熟させたことになっている．そうした翻訳での一番人気の原作者が彼であり，【3453】によると，「明治における西洋小説飜譯の最初」（p. 159）たる『花柳春話』（1878）は，彼の *Ernest Maltravers*（1837）を原作としており，それは『新體詩抄』（1882）や『小説神隨』および『當世書生氣質』（1885－86）にも先んじる登場であった.

彼の小説の多くが「才子佳人離合の情を描いた人情小説」であって，「イギリス固有の社交小説と思われ，政治小説につながる一面」（【7871】p. 21）も有していたので，「日本の讀書界を刺戟したのは異常なもので，明治十年から二十年代の初頭にかけ，リットンの譯書は最も多く現われ」（【72X1】p. 395）た.[26] しかし，「明治二十年代の半ばを過ぎると，わが文壇の事情も進み，西洋文學の表裏も明かになり，リットンのイギリス近代文學史に占める地位が決して第一流のものでない事も明かに」（【72X1】p. 397）なってきて，一般読者からは次第に見放されていったそうである. 僅かに Hearn が *Interpretations of Literature* で Poe に及ぼした悪夢の影響を指摘（原著 II, 98）して「興味を再び英學書生の間に燃やすに幾分の貢献」（【3453】p. 163）をしたくらいであった．そして，「もしリットンを讀む者があるとしても，それは『ポンペイ最後の日』［*The Last Days of Pompeii*（1834）］の一作に限られてゐるであらう」（p. 199）というのが，【2861】での木村の見立てであった.

[26]【3453】（p. 161）は Bulwer–Lytton の翻訳や翻案を 19 世紀末までに 11 点数えている.

当の木村も【72X1】に井上勤訳『龍動奇談』(1880)を解題した際に，定説に従って原作品を *A Strange Story*（1862）としてしまったが，紀田順一郎から *The Haunters and Haunted*（1857）ではないかと指摘されて，翌年の【7331】で，「原作との對比を怠った」ことを認め訂正するとともに，改めて *A History of English Literature* から原作についての Hearn による評価（原著 pp. 574－575）を訳出して体裁を繕っている．ここでもまた，彼が Bulwer-Lytton に対して覚えたのが作品を読み込む文学的興味というよりも文化史的興味のほうにあったろうと想像されるのである．

目を転じて【36Y1】を開くと，滞英中の 1928 年頃，木村は「僕の好みは偏してゐる．先づジョウジ・ボロウのジプシイもの…つゞいてはウォツ・ダントンのアイルヰン…スノウドンの山を舞臺にした神韻漂渺たる同じジプシイのロマンスです．それからブラック・モーア（ママ）のローナ・ドーン．」(pp. 51－52）と語った一節に行き当たるが，**Walter Theodore Watts-Dunton（1832—1914）**の *Aylwin*（1898）については，漱石の「小説「エイルヰン」の批評」(1899）を彼は読んでいたであろうし，戸川秋骨が訳した『英國近代傑作集上巻：エイルヰン物語』(國民文庫刊行會，1915）を見逃したはずはなかったろう．また【3121】には，1929 年の夏に「北ウェールスへ入つて，『アイルウヰン』と云ふ哀切なジプシイの戀物語で名高いスノードンの山に登」(p. 232）ったとあるが，作品そのものについて木村は具体的に語っていないようだ．そして **George Henry Borrow（1803—81）**についての知識は，Hearn の *Life and Literature*（1917）あるいは *A History of English Literature*（1927）や，平田禿木の『最近英文學研究』(研究社，1913）から仕入れていた可能性も考えられる．ところが彼が Borrow に言及した事例が他に見当たらないことから，読んだ作品名，時期，感想等は判らないままである．いっぽう **Richard Doddridge Blackmore（1825—1900）**の *Lorna Doone*（1869）は Scott の流れを汲んだ歴史的ロマンスでもあり，木村は『最近英文學研究』を切っ掛けにして愛読するにより

になっていたようである．【35X1】によると，特に鰌（どじょう）に触れた箇所のある西洋小説であることを珍しがって，その棲息環境を観察すべく 1929 年には Devon まで「日本人などで滅多に行く人はない」（p. 85）はずの Doone Valley を探訪したほど，彼が「偏してゐる」ことは解るが，それ以外のことは判らない．

彼が親しんで（あるいは挑み掛かった）文人のなかでも特異な存在が **George Meredith**（**1828—1909**）であった．とりわけ長篇の *The Egoist*（1879）は，【75X1】によれば，漱石が「日本で本当にメレディスの読めるのは平田禿木君と俺ぐらゐなものだらう」（p. 439）と呟いたことがあったらしい．入営中に木村は *The Egoist* に突撃して玉砕の憂き目を経験した．それでも，心酔してきた漱石の門弟に連なりたいとの思いを募らせるあまりに，*The Egoist* の読破には象徴的な意味合いを感じていたかもしれない．ところが現実には，「平田禿木氏が翻訳に着手したと聞いた時…驚いた．…日本文になっても読過が容易でな」（p. 442）いことを，彼は再認識させられたのであり，結局生涯を通して読破できず仕舞いになったようである．僅かに *The Egoist* の序章と最終章に『虞美人草』との類似を指摘するくらいの仕事（発表先不明）はしたらしいが，それには平田訳『我意の人』（國民文庫刊行會，1917）も多少は貢献をしていたかもしれない．

このような悪戦苦闘をさせられながら，晩年近くの【75X1】になって木村が到達した境地は，「メレディスの作は一体どんな風であるかと訊かれたら，自分はこの「虞美人草」を取つて，先ずこんな物と思へば間違ひなかろうと答へる」（p. 440）と喩えた平田に納得が行くようになり，厨川白村が漱石の『行人』は Meredith を読む様だと評したのを，「「虞美人草」と「行人」とはだいぶ感銘がちがうが，そんな一面もあるかと思い，メレディスを又考え直さざるを得な」（p. 441）いという心境を自覚できるようになったことであった．

木村は書簡集も読んでいたようで，詩人から転向した Meredith が「世間の奴隷となつて小説を書く」には書いたが「たつた一つ失敗した事があつた——

それは直接に世間的人氣を得るという事であつた.」(pp. 86－88) と述懐したのを読んで，さもありなんと【22X1】で頷いている．それでも【2492】になると,「彼は不人気を歎じはしたが心中窃かに，自分はベストをつくした事，そして出來上つた作品が甚だ傑れたものである事を信じてゐた．更に想像を巡らせば，恐らく自分が英文學史中最も重要なる一作家であり，その作品が亦不朽に価する事も信じてゐたであらう.」(pp. 53－54) と，今度は Meredith の密かな矜持を忖度する余裕も見せている．

しかし結局,「メレデイスの偉大さは，一般俗衆は到底歯も立たない，そして心に十分な準備教養ある者のみが嗜み得る含蓄を作品の中に有する點にある.」(p. 274) という認識が,【33X1】時点で彼が掴んだ Meredith 観であり，それは同時に自分も一般俗衆のひとりに過ぎないという苦い認識でもあった.[27] その傍ら【22X1】では，*Rhoda Fleming* (1865) は読者を惑わす結構 (plot) の悪例であろうと名指ししてみたり (pp. 80－81),【75X1】では，彼の悲喜劇論が小説化された *The Tragic Comedians* (1880) を読んだら,「面白さに一気に読了した．…つまり辛うじて筋を辿っただけである．それでもある時は巻を手からはなせぬ程面白かった.」(pp. 444－445) と健闘し続けており，即かず離れずの構えで Meredith と対峙してきたようである．

木村が作家に寄せた敬愛や愛着が邦訳として姿を採ることもあった．ポーランドの Henryk Sienkiewicz (1905 年に Nobel 文学賞を受賞していた作家) による代表作で Scott の流れを汲む歴史小説 *Quo Vadis* (1895) は各国語に訳されて，彼も少年時代に抄訳で愛読していた．長じても，ポーランド語は読めなかったので，4 種の英訳を比較しながら，邦訳【2461】を完成させている．耽読が翻訳に結実した例は **William Henry Hudson** (**1841－1922**) にも見られた.「尋常科の時…山へ入つては小鳥ばかり見て」(【36Y1】p. 271) いた木村

[27]【7991】(pp. 212－213) によると，彼が手にした参考書は入営中に取り寄せた G. M. Trevelyan 著 *The Poetry and Philosophy of George Meredith* (1906) だけであったらしい．

少年は，【5651】（pp. 85－112）におけるように，国木田独歩の『春の鳥』から Wordsworth に惹かれていく少年でもあった．長じては「小鳥の父と云はるゝ W・H・ハドソンの諸著作を非常に愛読する」（【3771】序）ようになり，「敢てハドソンを渉獵したとはいはぬが，その二三の著書を愛讀する熱意においては人後に落ちない」（【36X1】p. 314）くらいの気持ちを *Adventures among Birds*（1913）の邦訳【3771】に具現させていた．

逆に敬愛しながらも木村が距離を保ち続けた作家も勿論いた．Ireland 出身の **George Bernard Shaw**（**1856—1950**）がその筆頭であろう．小説は 5 篇しか書かなかったが本領は 50 篇ほどある劇作のほうで，1925 年にノーベル文学賞を受けていた．木村は【5611】で，*Caesar and Cleopatra*（1898），*Man and Superman*（1903），*Back to Methuselah*（1918－20），*Saint Joan*（1923）を傑作に挙げてはいるが，かつて逍遙の授業で Shaw を教えられたときの，「面白いとは思ったが，性に合わないというのか，どうも好きだというわけには行かなかった」（p. 210）という印象は変わらぬままで，僅かに *Saint Joan* が「少女英雄をまともに書かぬ．パラドキシカル・ヴュウ（つむじ曲りの見方）…逆に見たような書き方」（p. 217）をしていて彼の趣味に適ったくらいであった．

彼が当初から描いてきた Shaw 像は，「社会主義的なきびしい正義感を，大阪にわかかチンドン屋式なオブラートに包んで，文学を以て世の改革に大きな仕事をしたのがショウだ.」（p. 213）という程度であった．しかし 1934 年に Shaw が世界周遊の途中で来日した際には，同じフェビアン協会員であった木村が改造社の特派員格で「上海，北京，神戸，東京と約二週間随行している中に，だんだん彼に敬服して…すっかり傾倒して」（p. 210）しまうという快事があった．それで【3351】によると，彼は大胆にも面と向かって，「ショウ翁よ．私はあなたの劇によつては必ずしもあなたを偉大とは思つてゐなかつた．併し親しく接していろんな事を話し聞かされてゐる中に，あなたの偉大さが初めて充分にわかつて來た.」（p. 344）と言い放ったそうである．この文人に接

して文学的にではなかったが思想的・人間的に親しんだ経験もまた，木村が積み重ねてきた英文学方面での経歴のうちに数えられよう．

次に触れるべきは，Scott と同じ Scotland 人で，Hearn と同年に生まれた，そして漱石も愛読した **Robert Louis Balfour Stevenson**（**1850—94**）であろう．木村が生涯を通して親しみ，機会ある毎に言及してきた作家のひとりであった．彼が小学生の頃に一度だけ新聞の連載小説を読み通したことがあって，その後受験準備で「英語の勉強にスティヴンスンの『宝島』を訳註書でよみ出した時，はてな，これはどこかで…」（【5651】p. 66）と思い当たったくらいであるから，Stevenson との出遭いは早かった．しかし「自然主義が英米文學を實價以下に貶斥」していた時代性に影響されて，早稲田在学中に読むことはなかった．彼が Stevenson の作品を読むようになったのは文筆生活に入りかけた 1921 年からであったようだ．[28]

読んでみての所感が【36X1】（pp. 90－93）に記されているが，*Treasure Island*（1883）の他にも *Dr Jekyll and Mr Hyde*（1886）や *Kidnapped*（1886）には木村好みの大衆文学的風味が備わっていたし，吉田松陰に取材した“Yoshida Torajiro”（1880）とか忠臣蔵の封建的道徳観に触れた“Two Japanese Romances”（1883）のような評論文は藝術的にも洗練されていて，「日本文化の宣傳としては非常に有効であつたに違ひない」と彼には思えていた．また東西文化論という観点からも Stevenson は彼を悦ばせたようで，遺作【8091】では，英訳「忠臣蔵」への称賛を“Two Japanese Romances”から邦訳引用して，「忠臣蔵が海外にひろく伝わったのには三つの系統」（p. 386）があったという木村の所説を展開させたほどであった．

【5651】（序）では，「じかに作品をよむこと以外は，先人の読書経験を，できるだけパァソナルに，個人的にかいた文章から，もっとも多くの指導と示唆

[28] 「スチヴンソンの愛讀書」が【2492】に収録される前の初出稿に見られた記述．

をうけたような気がする．そういう意味で，…内容として最高のものとは思わぬけれど，面白いことは，まことに面白い.」と語って，木村はStevensonの“Books Which Have Influenced Me”（1897）にも注目していた．それはStevensonが感銘を受けた12〜13作品についての所感集であり，その具体的内容は【2492】のpp. 183－191に要約されているが，*The Egoist*は5〜6回読み返したと然り気なく記されているのを目にして，木村としては生まれついた母国語の違いを思い知らされたことであろう．

19世紀も末まで下ると，彼が興味を示し積極的に話題にするような英国小説家が少なくなったと筆者（藤井）は感じる．目に付いたところでは，【2493】における**Joseph Conrad**（**1857—1924**）がいた．一般に英語は文学的表現に向かないと考えられていたなかで，船乗りのConradがフランス語を用いなかったのは，「海洋に於ける自分の經驗や感情の最も多く英語向きであり，且つ英國人向きである」との判断が働いての選択であったろうと木村は見る．そのConradを巡って日本の「英學生仲間に急に騒がれ出したのは平田禿木氏の『青春』の譯註が彼等の若い胸の血をそゝつてからであつた」らしいが，*Youth*（1902）の平田版が刊行されたのは1920年2月であったから，木村がかつて【2111】でConradに触れた頃は騒がれる以前のタイミングであったようだ．

1907年にNobel文学賞を得ていた**Rudyard Kipling**（**1865—1936**）の作品ではユニークな設定のものが紹介されている．すなわち【2492】は，短篇小説での結構上の参考例として「一匹の死猫を描いて，かなり面白い作」（p. 98）である“Un Unsavory Interlude”（1899）を，あるいは「二つの「私」を結合し…餘程こみ入つた結構」（p. 131）に書かれた“The Man Who Would Be King”（1888）の存在を教える．その後の【4871】でも，「混合的觀點」の例として“Soldiers Three”（1888），あるいは“A Deal in Cotton”（1907）を「觀點を變えて同じ話を二度繰返して語るトリックに興味がある」（p. 156）と紹介するなど，読者に好感されそうな作品の発掘に前向きであることを窺わせる．

いかにも木村らしい，ジャーナリスティックな興味に沿った付き合い方であったと評せようか.

これも，発禁騒ぎに関わるジャーナリスト的好奇心からであろうが，彼は発禁必至の *Lady Chatterley's Lover*（1928）を私家版で大佛次郎から入手して読んでいたが，「ひどく傑作とも思わなかった」（【5251】p. 206）と，一度言及したきりで素っ気ない．純文学でも Kipling のように目先の変わった設定に巧みな作家なら愉しめる木村であったが，**David Herbert Lawrence（1885—1930）**では純文学であり過ぎたのであろうか.

同じ頃に木村が 20 世紀初頭における英国の純文学界を眺め渡した一節があり，そこに彼なりの認識が集約されているようなので，参考のために【3451】から引用しておこう.

> 小説の方では，ヴィクトリア朝の作家の影響はむしろすくなく，フロベール，ゾラ，モーパッサン，トルストイ，ツルゲーニェフ等，外國のリアリストの創作態度及び技法が壓倒的な影響を若い人々に與へた．ヂョーヂ・ギシング，ヂョーヂ・ムーア，アーノルド・ベネット等がそれである．こうした國際的影響と，デモクラシー及び社會改造の思想の影響の下に，イギリスの社會生活を分析する作家も生まれた．ヂョン・ゴールズワージー，H・G・ウェルズ等を代表とする人々である．（p. 74）

これだけ作家名が並ぶなかで木村が関わったのは，僅かに卒業論文でお世話になった Flaubert と，【22X1】所載の諸論文を執筆するときに利用した Bennett と，【2271】の原著者 Tolstoy くらいであったから，20 世紀になってからの英文壇での純文学的な小説家となると，もう木村の関心の埒外に去ってしまったかの観がある.

引用にあった Wells と，その絡みで **William Morris（1834—96）**をちょっと

見ておこう.【2261】は，ユトーピア文学と Morris の「社會改造に關する意見」に序文で触れている．すなわち Morris が Marx 流の「貧富の懸隔に依つて魅き絡はれてゐる革命」をではなく，「生産者なる概念に依つて支配せられた革命」（p. 78）を希求する藝術観を有していたことを，木村は *News from Nowhere*（1891）に描かれた理想社会を読んで裏付けようとした.

いっぽう **Herbert George Wells**（**1866—1946**）については，【33Z1】が，「未來國の豫想を數多く描いた作家」（p. 152）としてフランスの Jules Verne と並べて注目しており，「今後の大衆文藝の中で最も發展の可能性ある科學小説を，その母胎なるユトーピア物語と關係せしめて考察」（p. 154）している．木村は英文学でのユトーピア物語の源流をエリザベス朝に求めて，Francis Bacon が *The New Atlantis*（1627）で描いた社会を「生産に力點をおいたもの」（p. 139）と読み，Thomas More の *Utopia*（1516）における社会が「所有（分配）に力點をおいたもの」（p. 139）であることと分別して，両ユトーピアにおけるコンセプトの相違に注目する．そして「今，二著を讀み比べてみると共通點は一つもないと言つてもよい．モーアが人類の幸福の招來は所有關係の變改にあると信じてゐるのに反し，ベエコンは自然科學を生産に應用して，之れを豐富にすることだと考へてゐるのである.」（p. 142）との認識を示す．そもそもユトーピア文学とは，「舊組織が倒潰しながら新制度のまだ産まれぬ時代…前途に何物かを望んでいる expansion の時代に多く生れる」（p. 136）文学であるとするのが木村の理解であって，既に第二の expansion に相当する産業革命を経験した時代のユトーピア文学は，資本主義による科学技術が向上させた生産性と共に共産主義的な分配も同時に実現される理想社会を描こうとする，科学小説に変貌してきたと彼は考えていた（p. 146）．そうして生まれた科学小説のなかで，大衆文学には不可欠な娯楽性も併せ備えた science fiction を提供した作家こそが，彼に言わせれば Verne であり Wells だったのである.

以上のような経緯から，20 世紀英文学に向き合うにしても，木村は軸足を純文学から大衆文学に移すようになった．【34Y2】において彼自身は，「知的教養にも訴へて來る」が「腹にもたれ過ぎ」ない大衆文学を求めるインテリ層をターゲットにした「インテリ大衆文學」とでも呼べる作品の執筆を意識しており，そこでは両語の語義的「矛盾の裡に見出される陰影が抑え難い魅惑なのだ」（序）と，木村流の大衆文学を規定している．しかも【3351】によると，彼が英国へ留学した 1928～29 年当時の「英國のジャアナリズムでは，今，純文藝は姿を消して大衆文學が全盛」（p. 95）になっていたから，ジャーナリズムに押され気味の 20 世紀純文学にはほとんど魅力を感じられなくなったようである．つまり【6921】にも，「はじめてイギリスに留学した当時，鋭敏な興味をもって英文壇の新作をあさった」（p. 48）とあるが，もっぱら大衆文学作品を漁ってきたと読み取られるべきであろう．

ということで，木村が見渡した大衆文学の流れが 20 世紀英文学の域内をどう流れ下ったか眺めてみると，Scott を源とした歴史小説の流れは Ainsworth で娯楽的要素を取り入れながら大衆文学へと分流したのであるが，【33Z1】が説くところでは，米国の Poe による 1841～45 年の 4 作，すなわち “The Murders in the Rue Morgue”，“The Mystery of Marie Rogêt”，“The Gold-Bug”，“The Purloined Letter” が合流してきて，「小説の形式を以てする嶄新な獨創的な興味（即ち謂ふ所の探偵小説）は初めて生まれた」（p. 168）ことになっている．その後に Dickens が *Bleak House*（1853）や *Edwin Drood*（1870）を発表しているが，木村の読みでは Dickens は必ずしも「犯罪――神秘（ミステリー）小説のテクニツクの先驅者とも認められず，また進歩せしめた一人とも云へ」（p. 170）ないらしく，むしろ *The Woman in White*（1860）を著した **William Wilkie Collins（1824—89）**のほうこそが「ポーの衣鉢を英國で承繼」（p. 170）したと木村は見ていた．

その後，**Arthur Conan Doyle（1859—1930）**が 1887～1927 年に発表した

Sherlock Holmes 物において「探偵小説は純化されて結實し」（【33Z1】p. 174），大衆文学でも主流になると木村が見做した推理小説の分野が確立したのであった．その日本への注ぎ込み辺りでは彼の示す関心が一層強まっており，【35X1】において「探偵小説の至寶ホームズの移植史に就いて，前人未拓の考證を試み」（p. 249）ている．具体的には，1900 年に「新陰陽博士」を訳載し始めた「抱一庵を以て先頭と見なすに大過あるまい」（p. 227）としつつも，1901 年の「森皚峰（がいほう）の『モルモン奇譚』には，原作者がドイルである事も，原作が『緋色の研究』である事も明記してある．即ちドイルを大衆讀者に最初に正しく紹介したのは，寧ろ此れ」（p. 240）であったというぐあいに蘊蓄が開陳されてくるのである．

また木村が，「大衆文學――わけてもそのジャーナリズムとの關係消長は，私が渡歐中最も力をこめて研究した題目の一つなので，その必要から幾人かのその方面の作家に會つた」（p. 242）ことが【3121】に記されている．【33Z1】にはその成果が報告されており，乱作がちで「私は決して彼の作風は好きでない」（p. 404）という **Richard Horatio Edgar Walles**（**1875—1932**）を訪ねて 1928 年にインタビューしていた．探偵小説家 **Sidney Horler**（**1888—1954**）とは数回会っており，彼自身が【3011】として邦訳することになる *The Mystery of No. 1*（1925）の翻訳権を取得した．しかし今日二人の作家を知るのはミステリー小説愛好家くらいなものであろう．また【33Z1】によると，改造社の代理で全集の翻訳権を得るために「ドイルと若干の交渉を持つ」（p. 410）ており，1929 年 5 月に格安で契約を結ぶに至るという快挙も成し遂げていた．[29]

木村は，大衆文学の王道を行くのは推理小説であるとのスタンスで，Charles Morgan 作 *Portrait in a Mirror*（1929）や Stanley J. Weyman 作 *A Gentleman of France*（1893）や William John Locke 作 *Beloved Vagabond*（1906）を強く

[29]『改造社文學月報』第 60 号（1931 年 12 月 8 日）掲載の広告には，同社の『ドイル全集』全 8 巻（1931－33）において木村が 4 作品を翻訳すると予告されている．

薦めるが，今日では読まれているのであろうか．あるいは **Arthur Stuart Mentes Hutchinson**（**1879—1971**）の人情小説 *If Winter Comes*（1921）も同様で，発表当時には評判も高く映画化され，彼も【30X1】で邦訳していたが，純文学でないだけに寿命は長くなかったようだ．

大衆文学にはユーモア小説も含まれており，彼が【3151】として邦訳した *Psmith*，*Journalist*（1915）の作者である **Pelham Grenville Wodehouse**（**1881—1975**）は，英米では（戦中戦後に排斥された時期もあったが）庶民に古き良き時代の上流階級を夢想させて息の長い人気を保ってきており，英国贔屓の日本でも最近邦訳書が精力的に出版されている．Wodehouse の（米国へ帰化する前の）短篇をよく載せていた雑誌『新青年』（1920～50）には木村も度々寄稿していたので，主人公が新聞紙面の一新に乗り出すという【3151】の設定に木村もジャーナリスト魂を揺さ振られたのであろう．しかし彼が改めて Wodehouse を論じることはなかった．

第 5 章　米文学への関心

先ず米文学の位置付けについてであるが，木村は【2091】で，「實を言ふと私は米國の作家のものはあまり讀んで居ない」（p. 33）と明かしており，その後【5732】になっても，「私も早稲田で英文学をやったはずだが，アメリカの現代小説などはよめない」といった調子で，米文学史を賑わした作品を積極的に読もうとはしなかったようである．更に，【6051】でもそうであったが，*A History of English Literature*（1927）に添えられた“Notes on American Literature”（1898）を概略とはしながらも本邦初の米文学史として奉ってきた木村であったから，「アメリカ流の粗野奔放な自由独立の気象になじんでいない」（p. 507）がために Hearn が下した，米文学には英文学並みの一級の詩作品は

絶無であるとした判定を木村も受け入れていたことであろう．木村が米詩人の名前に言及することはあっても，作品に入り込んで賞味するという場面がほとんど見られないからである．そうすると，【3491】でのように，19 世紀までの米国は英国植民地の文化圏内に足踏みしたままで，Emerson や Poe や Hawthorne でさえ「英本國に認められさうに書き，事實，認められる事が本願でもあつた」（p. 3）とする木村の指摘や，【2091】の「亜米利加の文學を殊更にイギリス文學から引離して見て，其處にどれ丈けの異なつた特色があるかは疑問だ」という見解も，彼なりに一貫していて成程と頷ける．

更に“Notes”には，米文学を二流三流の文学と見るならば重要作家の 25 人や 30 人は挙げられるであろうが，英文学の基準で数え直したら 2〜3 名しか残らないであろうという Hearn による見立てもあるので（原著 p. 866），木村もその辺りを目安にして，【3491】のなかで，旧植民地では 20 世紀を迎える頃になってから Joaquin Miller[30]，Bret Harte，Mark Twain が登場して，詩ではなくて主に短篇小説において「舊本國に見られない脈搏を打ち出し」（p. 3）てきたとの観測を示して，この辺りから本来の米文学に相応しい作品がいよいよ登場し始めたと考えたようである．こうした見解は後の【5651】にも継承されていて，

> その文学も単にイギリス文学の分家という域にとどまって，独自のものを産み出すのに骨がおれ，ひまがかかった．詩人のホイットマン，オーキン・ミラア，小説家のブレット・ハート，マーク・トウェーン，哲学者ではウイリアム・ジエームスあたりから，アメリカはようやくはっきりと，イギリスをはなれて，文化的独立の実をあらわした．（pp. 197－198）

[30] *Joaquin, et al*（1869）を発表したことから Joaquin Miller の筆名で知られるようになった詩人 Cincinnatus Hiner Miller（1837－1913）のことらしい．

ここに米文学の創始期を形成した陣容が揃えられていると見做すならば，以上がすなわち木村の揺るぎのない米文学史観の核心であるといえよう．そのようにして独立してきた米文学では，その後新たに登場する注目すべき作家たちが文壇を育てていくのであるけれども，当時にあっては歴史もまだ浅かったために，彼が示した関心の度合いは，【2111】すなわち「現代英米文學」での頁配分で忖度すると，英国文学 10 に対して米文学 1 程度の割合でしかなかった．

それならば，米文学に対する関心の薄さが米文化に寄せる彼の関心の度合いに直結したかといえば，そうでもなかった．比較的若い頃に米国の風土文化に直接触れる機会が彼にはあったからである．【36Y1】（pp. 117 & 124 & 289）と【7821】（p. 108）の記述を総合すると，彼は 1931 年に，在米日本人労働者協会から招かれて，田原春次（後の社会党代議士）と淺原健三（無産党代議士）との 3 人で 4 月に浅間丸で横浜を発ち，「オープンのフォードを一臺買つて米大陸を走破すること二萬キロ，メキシコやカナダまで」脚を延ばして遊説した経験を有していた．しかし移動中は，「私はもちろん政治的関心はうすいので，渡米しても文学や日米関係史の調査の方を主にし」たそうである．そして，同年 9 月に春洋丸で帰国するまでの半年間に得られた成果が，後の【55Z1】【6051】【7821】において活かされることにもなったからである．

それでは，Hearn が水準を下げれば 25〜30 名と数えたレベルの米文学作家のうち，木村はどのような顔触れに注目したのであろうか．古いところで **Benjamin Franklin（1706—90）**は，【55Z1】によると，明治 18 年（1885）前後に「日本人が最も早くその名を知ったアメリカ文人」（p. 170）になるそうで，彼の *Autobiography*（1818）は「十九世紀に盛大の頂点を画した資本主義道徳」（p. 187）を説いた書として，国木田独歩，正岡子規，夏目漱石たちに読まれたり，「日本の都鄙を通じ，英語の教科書として広く用いられ」（p. 183）た結果，明治文化に貢献するところが大きかった．しかし「第一次世界大戦にとも

なって，社会主義のいちじるしい勃興をみると共に，フランクリン式の道徳は否定せられた」（p. 187）ということで，木村は文学的というよりも文化史的視点から Franklin に興味を覚えたようである．

19 世紀になると，**Ralph Waldo Emerson**（**1803—82**）がいる．木村は学生時代に増田藤之助の授業で読んだと【56Y1】で触れているが，書名も感想も成績も伝えられていない．いっぽう【55Z1】が「明治以降の読書界では，最も広くよまれた作家」（p. 79）としていた **Nathaniel Hawthorne**（**1804—64**）については，Hearn が“Notes”で講じた主要作品に関する「ことに傾聴に値する」説明を読んで，「“Rappaccini's Daughter”という短篇の妖美を口をきわめて激賞した」（p. 80）ことにも言及するが，木村自身は「愛慕する氣にはなれなかつた」のか，個々の作品について特段の論評はしていないようである．

但し，昭和初期の円本ブームの火付け役[31]でもあった彼は，『世界文学全集』を企画していた新潮社に対して，「私はホーソンやポーをのぞいてはならぬことを，最後まで主張した」（【7991】p. 364）くらいであったから，【2091】ではまだ敬遠していた *The Scarlet Letter*（1850）を読んでいたはずである．そして【5981】によると，『世界文學全集 11』（1929）の刊行後に「緋文字」を担当した福原麟太郎執筆の序文を読んだとき，Hawthorne が日本ではお馴染みの *Peter Parley's Universal History*（1837）の執筆者と教えられて，「へへえ，そんなこともあるのか」と驚かされたことがあった．しかしその驚きが二人を近づける機縁には，残念ながらならなかったようである．[32] その後木村は【6921】で *Parley's History* を取り上げて，「いまだ盛名をなさぬ前の小説家ホウソンの「バイオグラフィカル・ストーリイズ」と，ほとんど同一の記述が「万国史」に散見するところから推しても，それはまちがいないであろう．」

[31]【7991】の「円本旋風の起原」（pp. 357－369）で，企画化の裏事情が明かされている．
[32] 福原とのニア・ミスがもう一回あった．それは【6921】の第九節「グレイの「墓畔吟」」（pp. 186－194）に語られている．しかし筆者が『福原麟太郎著作目録』（九州大学出版会，2014）を執筆していて木村の名に遭遇した記憶は一度もない．

（p. 100）と自らでも再確認したほど，その指摘を面白く思ったのであろう．

生年順で次に来るのは詩人 **Henry Wadsworth Longfellow**（**1807—82**）であるが，木村は【55Z1】の「ロングフェロウと日本の新体詩」（pp. 188－220）において，彼の“The Village Blacksmith”（1840）が日本に最初に紹介されたアメリカ詩であったという巡り逢わせを日本文化のために慶賀している．先ず短詩であり，Longfellow その人も作詩法での「new beauties, new values, new ideas の教育者」（p. 192）としてであれば英米にでも通用すると Hearn が“On a Proper Estimate of Longfellow”で太鼓判を押していたからである．更に Hearn は，“The Bells of San Blas”（1882）を解説して，「日本詩人の作と，最もすぐれた資質において酷似している行節がたくさんある」（p. 193）点を評価したが，「彼の作詩技術は，最大詩人が具備していなければならぬ高さに達していない」（p. 212）と指摘することも忘れなかった．作品が読みやすいのは結構であるにしても，当時既に「日本でも大学で英文学を専攻するほどの学生なら，もうロングフェロウを尊重する段階は通りぬけてきていることを，ヘルンは感づいていたから，そのために言った弁明と警告」（p. 212）の積りなのであろうと，文壇の動向を察知するに敏感な Hearn の感性を木村は信頼しきっていたようである．それだけに，戦後になってもまだ「西洋詩への入門としてロングフェロウほど適当なものはない」（p. 190）と説いていた齋藤勇を引き合いに出すまでして，（かつて Hearn を放逐した）アカデミズムの沈滞的体質を在野の側から攻撃することも厭わなかった．

しかし，前章でも触れた **Edgar Allan Poe**（**1809—49**）となると，木村のスタンスが前面化して見えてくる．【6051】でも，「ロングフェロウは年とともに色があせて…今日わが国ではほとんどかえりみる者もないのに反し，ポーの方は…尻あがりに読者がふえている」（p. 404）現象を見逃さず，「ポーの文学的三大功績は，すぐれた詩と，探偵小説を創始したことと，短篇小説を長篇や中篇から独立させたこと」（p. 467）に帰せられると木村は考えた．すなわち第

一の詩における功績として，*Interpretations* ちゅうの「ヘルンの講義（Poe's Verse）で，“repetend”（巡環節）…を新案のメロディとして詩のなかに導入したものこそポーだといい，これは同一句をくり返す refrain とはちがって，各節ごとにすこしずつ変化する」（p. 468）という Hearn の説明（原著 II, p. 151）に注目した．第二としては，【67Y1】で，Poe を「近代探偵小説の創始者」たるに相応しいと認定し，1841 年 4 月に発表された“Murders in the Rue Morgue”をその第 1 号としている．[33] 併せて Poe の日本文壇への影響例も【6921】で触れており，岡本綺堂の半七捕物帳シリーズにある「猿の怪」（1917 年発表の「半鐘の怪」）には『モルグ街の殺人』の面影が濃いとしている．現に木村が中里介山と散歩しながら綺堂の仕込み先の話をしたら，介山は「そうか」と，歩みをとめて，「半七捕物帳の話材をどこから得てきているかと，久しく疑問にしていたのだが，なるほど，それでわかった．西洋種子をつかっているのだとは気づかなかった．」（p. 215）と唸るように呟いたそうである．

そして Poe の第三の功績，すなわち米文学に由来する短篇小説の手法は木村にとって主要な関心事でもあった．それで Charles Sears Baldwin 著 *American Short Stories*（1912）を参照しながら【2492】を執筆したとき，木村は「短篇の樹立者ポウ」（pp. 72－77）において，短篇小説観のようなことを述べていた．すなわち，

> 「事實から眞理」を抽出して來るのが長篇なら「眞理へ事實」を肉付けて行くのが短篇だとも言へる．…長篇小説はかなり現實的に描いてゐるが，短篇になるとどうしても浪漫的な色彩が多い．ポウ，ホウソン，スティヴンスン，

[33] 同じ【67Y1】（pp. 2－20）で木村は，オランダのクリストマイエル（J. B. Christemijer）作「青騎兵」（“Belangrijke Tafereelen uit de Geschiedenis der Lijfstra Regtsplegling,” 1819）のほうが厳密な意味での最初の探偵小説であり，「しかも完全に近代小説の体をそなえた名作」であるとして，神田孝平訳で全文を掲載している．

> キップリング等英米のすぐれた短篇作家は悉く浪漫派に屬する．これは作家の素質によること勿論だが，又一面からは短篇の約束がさうあらしめたのである．（p. 93）

というように集約されている．彼の Poe への傾倒振りは，例えば “The Black Cat”（1843）が「すきで，何度もよんでいるので，その原文は諳誦はできなくても，ほぼ頭の中にある．」（p. 419）と，【6051】で明言したほどであった．

続いて，**Herman Melville（1819—91）**の *Moby-Dick*（1851）は *The Scarlet Letter* の翌年に出版された長篇小説であるが，木村は【7821】（pp. 166－169）で，米国の捕鯨文化と日本のそれとの文化史的関連について簡単ながらも興味深く述べている．とくに『白鯨』は，親戚筋の阿部知二による本邦初訳が 1941 年に出版されていたから，翻訳を「大いに利用している」そうである（【7991】p. 316）．

Walt（er）Whitman（1819—92）への言及も見られた．【7821】（pp. 29 & 100）によると，受験のため英語を勉強中に木村は内村鑑三が愛唱する欧米の短編三十篇弱を訳した『愛吟』（1897）という詩集にこの Whitman や Longfellow や Browning などを読んで「西洋文芸に対する最初の開眼」を果たしたらしいが，【3491】でも，米文壇の創始に先立つパイオニア的詩人として Whitman のことを別格的に見ていた．特に【36X1】は，「それまでの優秀な米文學は米國的題材を取扱ひながら，英國的態度と解釋しか示してゐないのに，ホイットマンとトウェーンだけが，米國的な素朴な靈感の上に産まれた文學者だと論ずる者が出て」（p. 234）いる状況を踏まえて，再評価への機運を感じ取っている．更に彼は，唯一日本人のみが米国人並みに Whitman を好んできた理由として，「一茶，良寛，啄木などと相通ずる生活詩である點が嗜好に合致する」ことを【5371】で推測もしている．木村自身がキリスト教徒であった縁から，内村鑑三の「詩人ワルト ホヰットマン」にも触発されて Whitman に親しむように

なっていた.[34] それが収録されている『櫟林集：第壹輯』（聖書研究社，1909）を「何度買つて人に與えて，又買つたか分らない」ほどに，彼は耽読してきた模様である.

その後も，例えば【5251】によると，長沼重隆の「ホイットマン研究は，目にふれた限り，合綴して愛読したし…終戦後に全集の「草の葉」第一巻が出ると，すぐ買い求めて勉強のためその全詩を，原作と対照して見た」（pp. 42－43）らしい．Whitman への傾倒振りを想像させるのは，【55Z1】所收の「ヘルンの非難」（pp. 163－165）であり，【6051】で見せた木村による Hearn への異議申し立てであろう．彼が心酔する「ヘルンは他の詩人には寛容なくせに，ホイットマンに対してだけは若いときから過酷である.」（p. 530）とか，「しかし今日，ホイットマンの研究がすすみ，細緻に正確になってくると共に，ヘルンが『草の葉』の詩人にたいして抱いていた謬見の基礎をなす事実の認識は，だいぶ訂正されねばならなくなってきている.」（p. 533）といった発言に，木村の Whitman 擁護の意気込みが窺われるからである.

また Whitman の人間性も木村を惹き付けていたが，【5741】（pp. 151－152）は切っ掛けになった裏話を紹介している．すなわち 1860 年に Whitman は，江戸幕府の使節が New York を馬車で颯爽と走り抜ける姿を目の当たりにして，日本に対する興味を大いに募らせた．偶々 Edward Morse が日本から帰国していたので，彼に “What Japanese life signifies to an American in the 19th Century” という題での講演を依頼して欲しいと，Whitman は友人の Horace Traubel に提案したらしい. ついでに, 馬場辰猪が著した *The Political Condition of Japan* を Traubel から借覧して，「ふしぎな制度の国もあるもんだなあ.」と頻りに感心したらしいから，こうした伝聞に接すると，これまで縁のなかった

[34] 大学部に仮及第した 1912 年頃であろうか，【7991】によれば，「自然主義の信奉者が急にキリスト教に百八十度の旋回をした」（p. 106）．また【5151】には，「學校卒業早々の頃，一夕角筈の内村鑑三先生をたずね…」とある.

読者でも Whitman の人柄に親しんでみたい気にさせられるのではないか.

「舊本國に見られない脈搏を打ち出し」たとして Whitman とともに木村が重視したのが,「単なる少年文学者ではない. アメリカ的文学を独立させた功績者」としての **Mark Twain**（本名 **Samuel Langhorne Clemens, 1835—1910**）であった（【5651】p. 197）. つまり作品のユーモアに木村は米文学らしさを認めていたのである. しかし彼が改めて *Tom Sawyer*（1876）や *Huckleberry Finn*（1884）を論じた気配はなく,【33Z1】で, Twain の出世作 “The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County”（1865）について,「よいユーモアと, 一の皮肉と哀愁とを含んで」（p. 382）いて「ユーモア文學として, 實に世界一の名作」（p. 379）とコメントしたのが, 彼が Twain に示した反応のすべてであった. この短篇については彼自身も（掲載先は未確認であるが）「十年ばかり前或る雑誌にその飜譯を掲げた」（p. 379）そうであるから, 短篇小説という視点からも Twain には関心を覚えたのかもしれない. また別の関心すなわち Twain は「そもゝゝこの着想を何處から得て來たであらうか」（p. 389）という好奇心に駆られて, 木村は 1932 年 5 月 14〜15 日には「飛蛙祭」が毎年開催される場所に佇んで,「珍無類の競技」に思いを馳せたこともあった.

木村が通り抜けてきた米文学の文人たちをほぼ出生順に眺めてきて, 最後に視野に入ってくるのは一人の小説家と一人の詩人であり, 二人とも女性であった. 女性作家とあれば一気に時代が下りそうにも思われるが, どちらも 19 世紀生まれであった. 詩人のほうは現代の純文学を敬遠しがちな木村の米文学史ではむしろ時代的には下限に位置していたし, 小説家のほうは木村好みの大衆文学畑における草分け的な存在であった.

先ずカナダの詩人 **Emily Pauline Johnson**（**1862—1913**）から. 父は Mohawk 族の酋長で母は英国人であった. 彼女の詩は,【3491】（pp. 3－4）の紹介によると,「舊世界にない粗朴な靈感と土の匂ひ」を湛えていて植民地文学

そのものであったが，“A Cry from an Indian Wife”ちゅうの一行“Revolt not at the Union Jack”を気に入った英国人が彼女の作品を英本国の文壇に紹介したことで注目されるようになった．また臨終の詩“And He Said, Fight On”に込められた白人に向けた彼女の鬱屈した思いが，またしても英文壇の好奇心に訴えたらしい．木村によると「先ずこの邊が，即ち植民地文學の植民地文學たる所以」（p. 27）であって，そうした受け取られ方をしながら，Johnson 女史はカナダ，オーストラリア，インドの誰よりも植民地文学の創成に寄与し得たのであった．

木村が読んだのはTheodore Watts-Duntonが序文を寄せた*Flint and Feather*（1913）であったと思われるが，全集といっても 160 頁くらいの冊子であった．そのなかから彼女のいちばん有名な詩“A Cry from an Indian Wife”と“The Song my Paddle sings”を木村はかつて【3491】（pp. 12－15 & 19－22）で大意訳したことがあった．【35X1】（pp. 284－287）にも同様の解釈が見られたが，【55Z1】所収の「インディアンの女詩人」（pp. 366－374）のほうで彼は，「彼女の詩の特色は二大別することができ，一つは圧迫された人種の悲しみ，うらみ・怒り・いきどおりを叩きつける．もう一つは人跡未踏の大自然を原始人の感じでうたうことである．」（p. 371）という評価を試みている．

ちなみに木村は，Johnson の“The Man in the Chrysanthemum Land”という詩にも【55Z1】で言及しており，「日本のことを歌った詩があるのは，アメリカ＝インディアンの遠祖の国という伝説的な思慕からでなく，被圧迫民族の立ちあがる共感からであった．」（p. 374）と，植民地文学に通底するメンタリティを日本に引き寄せて指摘している．

もう一人の女性作家は**Bertha M. Clay**（本名**Charlotte Monica Braeme, 1836－84**）であるが，米国の通俗小説家で 500 作ほど書いたらしい．Hearn は見向きもしなかったし，米文学史にも登場しない．手近な参考書では『研究社英米文学辞典』（1985）にやっと項目を見出せたくらいで，ほとんど忘れられ

てしまった存在と想像される．英語で書かれてはいても純文学ではないので，読み捨てられがちな小説ばかりを彼女は生産していたことになる．ならばわざわざ米文学に分類してまで本稿に取り上げることはないかもしれない．しかし木村の意識では〝現代文学≒大衆文学〟の図式になっているようなので，彼が親しんだタイプの現代文学を展望するのであれば，純文学への拘りは却って視野を狭めることになろうから，本章の締め括りとして Clay にも一瞥しておくことにした．

木村と Clay との馴れ初めは 1913 年で，尾崎紅葉の旧蔵書であった *A Broken Wedding Ring*（1891）を知人から入手したことに始まった．すなわち【75X1】によれば，「題からして通俗くさい．早稲田の文科の学生で，純文学でこちこちの私の手の出る品物ではなかった．…叙景など美文句調だからまことに読みいいので，二週間ぐらいかけて，読み上げた．これが私の英語の通俗小説のよみ始めである．」（p. 478）と，原書に遊ぶ初体験につながった．その後 1914 年頃に知人の坂本健一から，末松謙澄が邦訳した『谷間の姫百合』（1888－90）や菊池幽芳（武藤山治）が翻案した『乳姉妹』（1903）の種本が Clay の *Dora Thorne*（1883）であると教えられたので，1919 年になって木村も丸善で購入した．「腹の中では，はなはだ軽蔑してよみにかかったが，思いの外に面白かった」ことから，「私は急に彼女に興味をもった．」（p. 480）と，馴れ初めから 6 年が過ぎて本気になったことになる．

いかにも木村らしいのであるが[35]，カタログに Clay 作とあった約 100 タイトルをすべて丸善から注文し，届いた 60 タイトルを片端から読んでみると，「なんとなく紅葉の『金色夜叉』の筋を思出させるものが二つも三つもあるのに気づいた．*When the Bell is Ringing* というのが殊によく似ていた．」（p. 486）という感触を得たので，1919 年 8 月には「『金色夜叉』のタネ本にはバーサ・

[35]【2642】には，「私は一つ感心すると，その人の作品を，片つ端から徹底的に讀んでしまはないと，氣のすまない性分がある．」（p. 254）と，好奇心の強さを披瀝している．

クレーのものをもちいたのだと推察されると書き，簡単に彼女の作風を紹介」（p. 486）したらしい.[36]【5881】でも，「低俗とはいっても，何か読者の心をとらえる秘訣を心得ている」からには「ミーハー小説の天才」（p. 243）なのであろうし，「愚劣な，低俗な作でも，天下を風靡（ふうび）したほどの小説には，文学的な意味は乏しくても，社会的意味は大きい」（p. 251）ことに違いはないとして，研究対象を Clay に「さかのぼることは，近ごろのように，比較文学の研究がさかんになってくると，ぜひ必要なのである.」（p. 252）という認識に到達していた．であればこそ，彼は【35X1】【6921】【8091】などで半世紀にわたって大衆作家 Clay に触れてきたのであろう.

第 6 章　その他のこと

以上において，木村が関心を示してきた英文学（および米文学）領域の作家や作品を並べてみた．本章ではそれ以外のこと，例えば【7991】に示唆されている作品を吟味する際の彼なりの基準らしきもの等々について付言しておきたい．何時の話なのか，書名が何であるかも判然としていないが，

> Existentialism（実存主義）の観点から書いたある新しい文学概論をよんでいたら，「I found myself the other man.」という感じを読後に与えるようなのが文学の特質だと書いてある文句に出くわした．私はたびたび，そういう経験をもっている…．（pp. 94－95）

[36] この記事は未確認．*When the Bell is Ringing* も不明．最近では堀啓子訳『女より弱き者』（南雲堂フェニックス，2002）が，*Weaker Than a Woman*（c. 1890）を『金色夜叉』の種本であると断定している.

という所感である．（英訳された）諸外国の文学であれ，日本文学であれ，分野を問わず手広く作品を読んで論じてきた木村にとっては，こうした読後感の有無あるいは強弱が作品の評価を見極める試金石だったのではなかろうか．これまでに挙げた諸作品において彼が示してきた親密度にバラツキが見られるのも，（筆者による読み取り不足を別にすれば）こうした判定が反映されたからであろう．

もし木村にとっての文学の目的が読後にそうした感銘をもたらすことにあったとするならば，苦労して原文で読まなくても翻訳で十分であろうというのも道理であり，英訳に頼ってきた彼なればこそ唱えて説得力が伴なおう．彼は【22X1】においても，外国文学を味わうのに「英獨佛譯を通じて讀むもよし．又日本譯で讀んでも一向差支へはない．…邦譯には原作の味ひや匂ひが抜けてゐるとか，誤譯があるとか言ふけれど，それでも生半可な語學力のあるものが辭書ももたずに讀み飛ばして行くのよりはよくも解るし，第一骨折が半分で済む．」（p. 19）と，ことのほか現実的で物分かりの良いところを見せていた．またそのいっぽう【7991】では，「若い吾々にとっては，翻訳するということは，精読の代りだった．」（p. 237）というように，翻訳をする側からも邦訳のメリットを説いている．それ故であろうか，木村の文章では英語の詩を論じる場面では引用に邦訳が添えられるし，時には腕捲りして自ら試みた訳詩が披露されることも度々であった．

何も原文の読破で苦労する必要はないという柔軟さの背後には，持って生まれた，そして中学での 5 年に及ぶ画一教育を免れたために一層助長された，不羈奔放な性癖もあったろう．そればかりでなく，大正デモクラシーの波に洗われた当時の学生や知識人にはありがちなように，木村にも 1920 年代に左傾[37]

[37] この問題には深入りしないが，急進派の稲村（1980）の回想では，木村は「社会問題にも興味を持っていたので，社会主義の本をいろいろ読んでいた．しかし彼はマルキストにはなれなかった．イギリス的温健な社会主義者というところだ．」（p. 28）．むしろ

した経歴があったので，斜に構えて体制や世間を冷眼視する態度が彼の第二の天性になってしまったようである．そうした経緯もあって，彼は体制志向のアカデミズムに反発するようになっていた．だからこそ，建前には拘らない在野の視線で象牙の塔の内部を批判的に眺めることができたし，国内外の状勢を冷徹に見極めることもできたのであろう．【2512】でも，ヴィクトリア朝最盛期までの作品に固執する日本の英文学専門家に対して，英文壇ではいま「全世界の急進思想と歩行を共にして大いに動かうとしてゐる」という現実を突き付けることができたのである．

在野としての自身のあるべき姿を彼なりにイメージすることは出来ていたようで，【36X1】には，「英學者とは，市河三喜博士のやうな英語學者でもない．又平田禿木氏のやうな英文學者でもない．維新あたりから明治中期にかけて存在したので，堪能な英語を通して，もつと廣く一般文化を吸収し，その教養を持つた人だ．…大學方面でも，厨川白村は純粋の英文學者だつたが，夏目漱石には英學者気質が半分あつた．」（p. 225）とあり，【7991】でも，遠縁であった矢野峰人の「学風は十分にアカデミックでもあるが，それ以外でもある」のを奇貨として「斎藤勇，福原麟太郎教授などの学風とちがって，どこか自由奔放で，ピチピチと跳ねているようなのは，上田敏博士からは隔世遺伝をうけて，厨川白村的ヘドロ[京大英文学の学風のことか]をあまり吸っていないからだ．」（p. 181）とある．半世紀を跨いで両見立てを読み合わせると，学閥に囚われない自由な研究ができて，英語に堪能でありながら明治文化研究者としても通用する視野の広さを有し，漱石の気っ風にも与れるような教養人を木村は理想にしていたように思えるのである．

しかしアカデミズムへの批判は，木村とは分野で重なり合う日本文学研究者に対してのほうが一層手厳しかったかもしれない．趣旨としては見当違いでも

太平洋戦争中には軍の報道部員として木村は佐官待遇までされ，終戦後は左翼文化人に対抗して自由出版協会を興して健筆を揮った．

なさそうなので，少々長くなるが，【36Y1】から引用してみたい．

> それは主として東京帝大の國文科系統の諸學者に依つて發表される諸論文に對する不滿である．あの人達は大學で學問を習ふ，その習ひ覺えた學問の型を明治文學の研究にあてはめて理屈をこねる．それが吾々のやうに別に手を汚してまで材料をさがすと云ふのでもなし，さればと云つて別に大した見識で，從來の評價を覆して鐵案を下すと云ふのでもなし，どちらにでも理屈のつく事を持ち上げて來て，誰れはどう云つてゐるが自分はかう思ふと云ふやうにたわいの無いものだ．それが多くはどつちに思はれたつていゝ事を机上でこね返してゐるのだ．これは著しく，文學の面白味をわざゝゝ消して鑑賞する研究方法である．あれは大學的學問の通弊かも知れぬが，英文學でも，私達は平田禿木氏の隨筆など讀むと，その面白さがそのまゝに受け入れられるが，齋藤勇博士の初期の註釋などは，その面白さがわざゝゝ殺してあるやうな氣がした．それで私は，わざとそれに反抗的に，明治文學はもつと面白く，趣味的に味はゝうではないかと云ふ心構へで，いろいろなものを發表した．（pp. 206－207）

しかしそこまで歯に衣を着せぬからには，木村の側には責められる欠点なぞ何もなかったと言えるのであろうか．彼は【6051】の「凡例」で，引用について「訳文は，私の語学力の不足と，せっかちの性質なのと，rough translation なのとで，まちがいが多い」（p. 14）のではないかと危惧しているが，あながち謙遜とばかりも言えない．彼の文章には時として不正確な記述が紛れ込んでいて，読みながら“あれ？”と思わされる場面も三々，五々三，七五三あったからである．ここでは（筆者も同罪を免れないのを棚に上げて意地悪を言うが），その極端な例を示しておこう．【22X1】の「序」なのであるが，「…主として彼の“Author's Crafts”を參考として本書の大体の組織を整へ，外に Tol-

stoy の“M［W］hat is art?”や R［L］afcadio Hearn の“Interpretation［s］of Literature”二巻，“Life and Literature”“Ap［p］reciation of Poetry”等を主なる參考とし…」と，集中的に出現している．誤植というより原稿に起因する誤記のほうが多いであろう．【6921】（p. 112）における詩題でも然り．【75X1】には，詩の引用（pp. 71－72）ちゅうに脱行・脱字・ダブりで満艦飾の賑わいになった例がある．書名の記述でも記憶に頼っている場合が多々あり，【6921】での書名 *Essays on Thomas Gray*（1960）は『トマス・グレイ研究抄』と読み替えられる必要がある．それで【75X1】に Bertha Clay 著とされた *When the Bell is Ringing* にしても，作品の存在を確認できないので記述の不備を疑ってしまう．

更に追い討ちを掛けるようで心苦しいが，【2642】には論文らしからぬ大雑把（おおらか）さも散見される．「今日から考へると，何といふ驚異，何といふ不思議であろう」（p. 137），「尤も私はそれを讀んだ事はない」（p. 137），「二葉亭の作を讀破しない人が文藝愛好者の中にあるとは考へられない．隨つてそれに就いては普く知れ渡つてゐる事と思ふから」（p. 137），「…というゴシップを昔の雑誌で讀んだ記憶がある．眞僞は疑はしいが，いかにも鷗外らしい」（p. 138）といった，アッケラカンとした書きっぷりには唖然とさせられるとともに，それもまたジャーナリストらしさであろうかと思えてしまうのである．

いうまでもなく，筆が勢い付いているときは一気に書き進めてしまって，事実関係の確認は後回しにするものである．その都度筆を止めていては精確ではあってもメリハリのない文章になってしまうからである．在野の木村が原稿料で生活していくには短時間に枚数をこなさねばならなかったろうから，心積もりはしていても確認作業を忘れてしまったり，校正を他人任せにすることも無かったとは言えまい．それだから誤記はもってのほかと読者が潔癖に走ってしまっては，損をするのは既に原稿料を貰ってしまった木村ではなく，木村ワールドに遊ぶ愉しみを自分から拒絶してしまう読者のほうであろう．もちろん上級読者なら蚤取り眼で粗探しをしながら読むという屈折した愉しみも享受でき

ようが，普通の読者には時により彼の文章を近似値で読んでいく寛容（おおらか）さを勧めておきたい.[38]

原稿料頼みの彼は【36X2】で，「私は極めて人がいゝから，物を頼まれると，『うん，よしよし』とすぐその好意に報いる方」であるとアピールしているとおり，依頼があれば分野を問わず健筆を揮ってきたので，「木村毅著書目録」を作成した谷沢（1995）は，木村が「世の誰かが直ぐ活用できる本を書く名手」であると感心すること頻りであった．その彼が執筆にあたって常に意識したのは，【6051】でも表明されているように，「文学が文学の上ばかりでなく，さらに広く実生活にあたえた影響をたぐってゆくと，そこには未掘の文化的鉱脈が埋伏している」（p. 4）という信念に基づくリサーチであった．谷沢（1995）もこうした手法には注目していて，

> 学問とは深遠で峨々たる理論体系であるべきだと信じている人びとにとって木村毅は無縁である．逆に学問とは零細な資料を根気よく蒐めて，それらを丹念に比較照合しながら，材料それ自身の語るところに耳を傾け，事実の堆積から意味するところを絞りだす作業であると考える向きにとっては，木村毅は気易い親類の伯父さんのような先達であろう．（p. 9）

と，人間味たっぷりの木村の学風を讃えているが，分野を狭めず地道な作業を積み重ねながら，比較文学がこれまで小数点以下として斬り捨ててきた研究対象の隙間（niches）を探り起こしてきては，学際的連想力を働かせて考証を積み上げていくことで，「文学交流史」という新たな視点の可能性を提案してきた．そしてその成果である【6051】により，木村は 1961 年に博士の学位を授与されたのである.[39]

---

[38] 筆者も多少はアカデミズムに毒されたせいか，他人様の誤記だと目に入り易く，見つけると居心地も悪くなるので，明らかな誤記は引用内でも silently に訂正しておいた.

[39] 【7821】からは，「今でこそ，この道の研究家が，三，五人ならず輩出しているが，そ

筆者も研究姿勢においては〝かくありたい〟との思いで，木村の発言を「蒐めて」みては，彼と英文学との親和性を「絞りだす」べく，本稿を執筆してみた．そのうえで「丹念に比較照合」したかと問われれば，著しく不十分なことを認めざるを得ないが，筆者のささやかな試みが発端となって，この多才な「文化的バタ屋」[40]を忘却の淵から引き戻して，多彩な分野での彼の「先達」ぶりを「絞りだす」機運を盛り上げることができれば，筆者としても本稿を執筆した甲斐があったと喜べるのであるが，さて如何なものであろうか．

参照文献（抄）

《凡例》

○ 本稿は本格的な書誌を意図していないので，引用した文献を中心に簡略に記述した．

○ なるべく単行書で読み，〖初出〗や〖再録〗も添え，未確認であれば *印を付した．

○【文献番号】は，西暦年下 2 桁＋月（10〜12 月は X〜Z）＋識別用の数字からなる．

《一次資料》

【2091】「英吉利文學に現はれたる戀愛」『中央文學』 第 4 巻 9 號　春陽堂　1920（大正 9）年 9 月 1 日　pp. 26－35.

【2111】「現代英米文學」『文章倶樂部』 第 6 巻 1 號　新潮社　1921（大正 10）年 1 月 1 日　pp. 80－92.

【2151】「批評家としてのラフカディオ・ハーン（メイスの論文を讀む）」『學

の時は，日本文学交錯の研究をまとめている者は，日本の学界ひろしと云えども，私のほかにはなかった」（pp. 236－237）という自負の念が伝わってくる．

[40] 谷沢（1995）p. 8.　但し憧憬の念を込めつつ先達に捧げられた称号のようなもので，【7821】における木村自身による「私の仕事は，捨てて省みられない紙屑拾いの仕事，バタ屋の意気ごみから始まる」（p. 237）に由来しているのであろう．

燈』 第 25 年 5 號　丸善　1921(大正 10)年 5 月 20 日　pp. 6－13.

〖再録〗:『學鐙』 第 89 巻 9 号　1992 年 9 月 5 日　pp. 55－57（抄録）.

【2261】 第四章「キリヤム・モリスと産業」『新學藝講座第二編：ルッソオよりトルストイまで』 金子筑水（監修）/ 木村毅（編）　春秋社　1922(大正 11)年 6 月 17 日　pp. 62－84.

【2271】 トルストイ / 木村毅（譯）『藝術とは何ぞや』 春秋社　1922(大正 11)年 7 月 5 日.　谷沢（1993）によると, Leo Tolstoy / Aylmer Maud (trans.), *What Is Art*（Walter Scott, 1899）からの重訳らしい.

【22X1】『新文芸講話』 春秋社　1922(大正 11)年 10 月 3 日.

- 「序」前付 pp. 1－2.
- 前編第三章「外國文學の研究」pp. 17－25.　〖初出〗:主に後半部「外國文藝の讀み方」『文章倶樂部』第6巻10號 同10月1日 pp. 14－17.
- 後編第三章「技巧の意義と構想法」pp. 77－84.　〖初出〗:同第 7 巻 6 號 同 6 月 1 日 pp. 36－39.　〖再録〗:【2492】
- 後編第四章「創作家と世間」pp. 85－91.　〖初出〗:『文章倶樂部』同第 7 號 同 7 月 1 日 pp. 26－29.　〖再録〗:【2492】

【2461】 シェンキェヴィッチ / 木村毅（譯）『全譯 何処へ行く』 春秋社　1924(大正 13)年 6 月 25 日.　Henryk Sienkiewicz 著 *Quo Vadis*（1895）の英語版から全訳.

【2491】「小説發生の階級的考察」『社會主義研究』 第 1 巻 5 號　日本フェビアン協會　1924(大正 13)年 9 月 1 日　pp. 46－49.

【2492】『小説の創作と鑑賞』 新詩壇社　1924(大正 13)年 9 月 11 日.

〖再録〗:第七～十一章が同じ書名の【4871】に.　〖改訂再版〗:【33X1】

- 「總論」pp. 3－20.
- 「創作家の資格」pp. 21－29.
- 「生活觀察の要義」pp. 30－39.

➽「創作家と世間」pp. 51－59.

➽「長篇，中篇，短篇の區別」pp. 69－93.

➽「『猫』の作例」pp. 96－98.

➽「小説の視點」pp. 129－134.

➽「傳記と小説の關係」pp. 135－155.

➽「ステイヴンスンの愛讀書」pp. 181－191.　〖初出〗:「スチヴンソンの愛讀書」『學鐙』第 25 巻 6 號 丸善 1921 年 6 月 20 日 pp. 7－12. 〖再録〗:『學鐙』第 89 巻 9 号 1992 年 9 月 5 日 pp. 57－59（抄録）.

➽「倫敦塔の話」pp. 201－212.　〖初出〗:『文章倶樂部』第 9 巻 8 號 新潮社 1924 年 8 月 1 日 pp. 42－45.

➽「創作題材としての戀愛」pp. 231－237.

➽「文藝の國際的に働く力」pp. 264－276.

【2493】「コンラッド逝く」『文章倶樂部』 第 9 巻 9 號　新潮社　1924（大正 13）年 9 月 1 日　pp. 5－7.

【24Z1】「ブラウニングの邦文研究書」『讀書人』 第 1 巻 4 號　第一出版協會　1924（大正 13）年 12 月 1 日　pp. 30－34.

【2511】『小説研究十六講』 新潮社　1925（大正 14）年 1 月 30 日.

➽ 第一講「小説と現代生活」pp. 3－26.

➽ 第二講「西洋小説發達史」pp. 27－56.

➽ 第三講「東洋小説發達史」pp. 57－79.

➽ 第四講「小説の目的」pp. 81－132.

➽ 第五講「リヤリズムとロマンチシズム」pp. 133－160.

➽ 第八講「人物・性格・心理」pp. 215－251.

➽ 第九講「背景の進化とその哲學的意義」pp. 253－283.

➽ 第十講「視點及び基調の解剖」pp. 285－314.

➽ 第十一講「力點の藝術的職能」pp. 315－355.

➽ 第十五講「文體・對・内容と形式」pp. 435－466.

➽ 第十六講「作家を中心としての小説の考察」pp. 467－501.

〖再刊〗:『小説研究十六講』 恒文社　1980 年 7 月.　〖新版〗:【3341】

【2512】「一九二四年の英國文壇」『文章倶樂部』 第 10 巻 1 號　新潮社　1925(大正 14)年 1 月 1 日　pp. 81－85.

【25X1】「イギリス文學」『世界文學の輪郭』 新潮社　1925(大正 14)年 10 月 20 日　pp. 187－202.　本書の第 12 章. うち末尾 2 頁が米文学を記述.

【2631】「西洋名作解説：リチャードスン作「パミラ」」『文章倶樂部』 第 11 巻 3 號　新潮社　1926(大正 15)年 3 月 1 日　pp. 134－138.

【2641】『文藝六講』 春陽堂　1926(大正 15)年 4 月 13 日.

➽「ブラウニングの詩」pp. 76－100.

➽「パラドックスの詩人」pp. 101－116.

➽「讀まざる詩人の追懐」pp. 117－127.　〖初出〗:『早稲田文學：バイロン記念號』早稲田文學社 (編) [第 2 次]第 219 號 東京堂 1924 年 5 月 1 日 pp. 73－80.

➽「近代小説の發見」pp. 169－179.　〖初出〗:『文章倶樂部』第 9 巻 7 號 新潮社 1924 年 7 月 1 日 pp. 38－41.

➽「エッセイの分析」pp. 191－200.　〖初出〗:『文章倶樂部』第 8 巻 4 號 新潮社 1923 年 4 月 1 日 pp. 18－21

➽「文藝と道德」pp. 235－241.　〖初出〗:「現代文藝と道德」『文章倶樂部』第 5 巻 9 號 新潮社 1920 年 9 月 1 日 pp. 20－23.

➽「天才と道德的缺陥」pp. 242－250.　〖初出〗:『文章倶樂部』第 6 巻 2 號 新潮社 1921 年 2 月 1 日 pp. 50－53.

【2642】『文藝東西南北』 新潮社　1926(大正 15)年 4 月 22 日.

➽ 内田魯庵「序」前付 pp. 1－2.

➽「飜訳文學雜考」pp. 130－154.　〖初出〗: *『早稲田文學』1925 年

6 月.

➽「モダン・ガールの創造者」pp. 254－265.　〖初出〗: *『解放』1926 年 2 月.

➽「雑學問答」pp. 278－316.

〖再刊〗: 平凡社 1997 年 11 月 10 日（東洋文庫 625）.

【2661】「牧歌文藝小論」『文章倶樂部』 第 11 巻 6 號　新潮社　1926（大正 15）年 6 月 1 日　pp. 118－121.

【26X1】「私の此頃の生活」『文章倶樂部』 第 11 巻 10 號　新潮社　1926（大正 15）年 10 月 1 日　p. 96.　アンケートに応えた短文.

【26Y1】「燈火に親しみつゝ：オイッケンを憶ふ」『文章倶樂部』 第 11 巻 11 號　新潮社　1926（大正 15）年 11 月 1 日　pp. 52－55.

【2861】『明治文學展望』 改造社　1928（昭和 3）年 6 月 28 日.

➽「『明六雑誌』の文學記事」pp. 2－19.　〖初出〗: *1927 年 10 月.

➽「明治飜訳文學の概觀」pp. 62－71.　〖初出〗: *1927 年 6 月.

➽「『小説神髄』小論」pp. 72－86.　〖初出〗: *1925 年 4 月.

➽「『文學界』を中心にしての斷層」pp. 188－202.　〖初出〗: *1927 年 7 月.

〖再刊〗: 恒文社 1982 年 1 月 31 日.

【3011】 ホルラア / 木村毅（譯）『世界大衆文學全集 11：秘密第一號 他一篇』改造社　1930（昭和 5）年 1 月 3 日.　Sydney Horler 著 *The Mystery of No. 1*（1925）他 1 篇.

【30X1】 ハッチンソン / 木村毅（譯）『世界大衆文學全集 55：冬來なば』改造社　1930（昭和 5）年 10 月 20 日.　A. S. M. Hutchinson 著 *If Winter Comes*（1921）の始め三分の一まで雑誌に訳出後，残りを寺田鼎が邦訳.

【3121】『巴里情痴傳』 千倉書房　1931（昭和 6）年 2 月 5 日.

➽「自動機のラヴ・レタア」pp. 232－241.

➽「三人の大衆作家」pp. 242－261.

〖復刻〗：石井仁志（編）『ライブラリー・日本人のフランス体験 第19巻：文学者のフランス体験II』 柏書房 2011年2月10日 pp. 257－566.

【3151】 木村毅（譯）『世界大衆文學全集72：新聞記者スミス 他二篇』 改造社 1931(昭和6)年5月20日. P. G. Wodehouse著 *Psmith, Journalist* (1915) の他にTheodore DreiserとArnold Bennettによる各1作収録.

【3341】『小説研究十二講』 新潮社 1933(昭和8)年4月10日（新潮文庫）. 【2511】を改編・改筆し，第一講と第八講を新たに加えた新版.

➽ 第一講「小説總論」pp. 5－24. 〖初出〗：「小説發達史第一篇」『文藝講座』第6號 文藝春秋社 1926年7月17日 pp. 1－18. 〖復刻〗：『文藝講座』大空社 1992年9月6日.

➽ 第八講「視点の分化と時代思想」pp. 200－219. 〖初出〗：「小説發達史第二篇」『文藝講座』第12號 文藝春秋社 1926年10月25日 pp. 1－18. 〖復刻〗：『文藝講座』大空社 1992年9月6日.

〖再刊〗：『小説研究十二講』 乾元社 1950年2月30日.

【3351】『現代ジャアナリズム研究』 公人書房 1933(昭和8) 年5月30日.

➽「英國ジャアナリズムと文藝の交渉」pp. 91－117.

➽「私の見た歐米文學者の私生活」pp. 133－154. 〖初出〗：*『新潮』1933年4月.

➽「東洋に於けるバアナード・ショウ：特派員としての隨行日録」pp. 269－329. 〖初出〗：*『改造』第15巻4號 改造社 1933年4月.

➽「ショウを尋ねて三千里」pp. 331－344.

➽「上海より北平へ：ショウ探訪餘録」pp. 345－371.

【3391】「漱石，樗牛も傾聽した名講義」『新修シェークスピヤ全集【豫約募集】』 中央公論社 1933(昭和8)年9月20日 p. 9. 第一回配本『ハムレット』の刊行日で記述．最終講義に居合わせた木村の思い出.

【33X1】「小説とその姉妹藝術」『現代小説の創作と鑑賞』 橘書店　1933(昭和 8)年 10 月 25 日.　【2492】を改訂，一部新稿と差し替えて復刊.

【33Z1】『大衆文學十六講』 橘書店　1933(昭和 8)年 12 月 22 日.

- 第四講「大衆文學と中世ロマンス」pp. 89－113.　〖初出〗: *「ロマンス考」『婦人公論』第 12 巻 10 號 中央公論社 1927 年 10 月.
- 第五講「歴史小説の誕生」pp. 115－129. 1933 年 11 月脱稿.
- 第六講「ユートピヤ物語と科學小説」pp. 131－154.　〖初出〗: *『世界文学全集 20』1928 年 2 月.
- 第七講「探偵小説の總展望」pp. 155－212.　1933 年 11 月脱稿.
- 第十一講（下）「『倫敦塔』斷章」pp. 304－314.
- 第十二講「『倫敦塔』見聞録」pp. 315－338.　〖初出〗: *『新青年』第 12 巻 5 號 博文館 1931 年 4 月（見出せず）.
- 第十五講「ユーモア小説の典型『跳蛙』」pp. 377－394.　〖初出〗:「蛙の珍競技」『新青年』第 13 巻 6 號 博文館 1932 年 5 月 pp. 206－213.　〖再録〗:『S・O・Sのアメリカ』千倉書房 1932 年 6 月 20 日 pp. 72－88.　『ゴオルドラッシュ』河出書房 1937 年 7 月 22 日 pp. 73－91.
- 第十六講「私の接渉した歐洲の大衆作家」pp. 395－415.　〖初出〗:「最近のドイル」『新青年』第 11 巻 12 號 博文館 1930 年 9 月 1 日 pp. 93－95.

〖再刊〗:『新版大衆文學案内』 八紘社　1939 年 3 月 31 日.　『大衆文学十六講』中央公論社 1993 年 7 月 10 日（中公文庫 き 21－1）.

【3451】『英語英文學講座：英文學の社會的背景』 英語英文學刊行會　1934(昭和 9)年 5 月 1 日.

【3452】「私はこんな經路からタイモンを愛讀した」『沙翁復興 8』 中央公論社　1934(昭和 9)年 5 月 1 日　pp. 5－7.　〖復刻〗: 名著普及会 1990 年

5 月 10 日.

【3453】『明治文學を語る』 樂浪書院　1934(昭和 9)年 5 月 12 日.

➽ 八「リツトン卿を迎へて：祖父バルワアは我が文壇開發の恩人」pp. 157－165.　〖初出〗：*『東京日日新聞』1932 年 2 月.

➽ 九「シエークスピヤと明治文學」pp. 167－190.　〖初出〗：『沙翁復興 4』中央公論社 1934 年 1 月 5 日 p. 34－49.　〖復刻〗：【3452】に同じ.

➽ 十二「漱石の道義觀」pp. 229－234.

➽ 十五「明治文學研究指針」pp. 253－265.

〖再刊〗：恒文社　1982 年 3 月 30 日.

【3491】『英語英文學講座：植民地文學に就いて』 英語英文學刊行會　1934(昭和 9)年 9 月 22 日.

【34Y1】「「お氣に召すまゝ」を觀て」『沙翁復興 14』 中央公論社　1934(昭和 9)年 11 月 5 日　pp. 50－54.　〖復刻〗：【3452】に同じ.

【34Y2】「序」『傳記小説集　福澤先生』 南光社　1934(昭和 9)年 11 月 6 日 pp. Ⅰ－Ⅲ.

【3531】 アンドレ・モウロア / 木村毅（譯）『傳記小説 バイロン』 改造社 1935(昭和 10)年 3 月 20 日.　原著は André Maurois 著 *Byron*（1930）.

【35X1】『青燈隨筆』 双雅房　1935（昭和 10）年 10 月 18 日.

➽「涙の文學的置位」pp. 63－65.　〖初出〗：*『時事新報』1933 年 10 月.

➽「鰌とその文學を語る」pp. 80－89.　〖初出〗：*『報知新聞』1933 年 1 月.

➽「ヤマトフ――増田甲齋――福澤諭吉――長瀬義幹」pp. 90－93.　〖初出〗：*『讀賣新聞』1933 年夏.

➽「坪内逍遙博士：個人的思出を通して」pp. 106－136.　〖初出〗：「坪

内逍遙論」『日本文學講座第 十二巻：明治大正篇』改造社 1934 年 4 月 8 日 pp. 1－21.

➽「坪内先生の『アキレス踵』：追悼の二」pp. 144－148.　〖初出〗：『沙翁復興 19』中央公論社 1935 年 4 月 5 日 pp. 20－23.　〖復刻〗：【3452】に同じ.

➽「昭憲皇太后の乙夜に入れる小説」pp. 202－224.　〖初出〗：「大衆小説隨講」『新青年』第 16 巻 1 號 博友館 1935 年 1 月 pp. 354－364.

➽「ホームズ探偵傳來録」pp. 225－250.　〖初出〗：『新青年』第 16 巻 2 號 博友館 1935 年 2 月 1 日 pp. 122－133.

➽「パウリン・ジョンソン嬢の詩」pp. 284－288.

【3611】『樗牛 鷗外 漱石：明治の肖像畫』　千倉書房　1936（昭和 11）年 1 月 18 日.

➽「坪内逍遙」pp. 143－168.　〖初出〗：「傳記物語：人間逍遙先生」『婦人公論』第 20 巻 4 號 中央公論社 1935 年 4 月 10 日 pp. 130－139.

➽「坪内逍遙（再び）」pp. 169－190.　〖初出〗：「傳記小説：坪内逍遙博士：落第から發奮して世界的文豪へ」『日の出』第 4 巻 5 號 新潮社 1935 年 5 月 1 日 pp. 152－163.

➽「バイロン」pp. 220－250.　〖初出〗：『人物と青年』潮文閣 1943 年 3 月 20 日 pp. 286－312.

〖再刊〗：『明治の肖像画：逍遙 鷗外 漱石』 恒文社　1981 年 5 月 31 日.

【36X1】『沙濱（さひん）散策』 信正社　1936（昭和 11）年 10 月 17 日.

➽「スティヴンスンの松陰論」pp. 90－93.　〖初出〗：*『日本精神講座第四巻』新潮社 1934 年 3 月 15 日.

➽「街の女に救はれた詩人」pp. 111－116.　〖初出〗：『新青年』第 16 巻 14 号 博文館 1935 年 12 月 1 日 pp. 164－166.

➽「自殺倶樂部」pp. 191－195.　〖初出〗：*『中央公論』.

➽「高橋五郎氏を悼む」pp. 225－228.　〖初出〗: *『東京日日新聞』.

➽「トウェーン百年祭に因みて」pp. 233－238.　〖初出〗: *『東京日日新聞』.

➽「高橋是清翁の投書」pp. 252－256.　〖初出〗: *『東京日日新聞』.

➽「春の小鳥」pp. 312－319.　〖初出〗: *『東京日日新聞』.

【36X2】「海外の綜合雑誌」『學鐙』 第 40 年 10 號　丸善　1936(昭和 11)年 10 月 20 日　pp. 2－6.

【36Y1】『旅と讀書と』 双雅房　1936(昭和 11)年 11 月 15 日.

➽「ディッケンズ記念の店を守る少女」pp. 2－19.　〖初出〗: *『若草』第 9 巻 9 號 寶文館 1933 年 9 月.

➽「ドロシイ・マイ・ガール」pp. 39－57.　〖初出〗: *同第 11 號 1933 年 11 月.

➽「往く船歸る船」pp. 117－129.　〖初出〗: *同第 10 巻 5 號 1934 年 5 月.

➽「三原山」pp. 130－146.　〖初出〗: *同第 4 號 寶文館 1934 年 3 月.

➽「明治文學研究の三段階」pp. 198－214.　〖初出〗:『行動』第 2 巻 12 號 紀伊國屋出版部 1934 年 12 月 pp. 153－163.　〖復刻〗:『複製版 行動』京都：臨川書店 1974 年 9 月 20 日.

➽「簡單な自叙傳」pp. 270－290.　〖初出〗:「四十餘年醉夢中」『文壇大家花形の自叙傳』大日本雄弁会講談社 1936 年 10 月 1 日（『現代』十月特大號附録）pp. 408－425.

【3771】 ウイリアム・ヘンリー・ハドソン / 木村毅（譯）『小鳥を友として』 改造社　1937(昭和 12)年 7 月 20 日（改造文庫第二部第二百九十一篇）.　W. H. Hudson 著 *Adventures among Birds*（1913）.

【4871】『小説の創作と鑑賞』 暁書房　1948(昭和 23)年 7 月 20 日.

明治大学新聞科や立教大学英文科での講義を集めるが，第七～十一講

（pp. 69－116）は同じ書名の【2492】から転載．　奥付での毅は「つよし」．

➽「内的觀點の解剖」pp. 129－141.

➽「外的觀點の解剖」pp. 141－149.

➽「基調の分解」pp. 149－157.

➽「傳記小説」pp. 177－180.

【4981】『新文章讀本』　旺文社　1949（昭和 24）年 8 月 31 日．

➽「六人の侍者」pp. 59－61.

➽「六歳の天才少女の日記」pp. 61－73.

➽「名作にあるミステーク」pp. 106－107.

➽「俳句から宗教へ」pp. 131－141.

➽「思想の價値」pp. 144－151.

➽「抽象と必要」pp. 152－154.

➽「人と氣分と目的と」pp. 166－175.

【5151】「米英書普及版展覧會をみる」『學鐙』　第 48 巻 5 號　丸善　1951（昭和 26）年 5 月 5 日　pp. 3－6.

【5251】『ふぐ提灯』　新潟：新潟新報社　1952（昭和 27）年 5 月 10 日．

➽「東京の四恩人」pp. 26－30.　〖初出〗：*『ニッポンタイムス』1951 年 8 月 4 日．

➽「「草の葉」完訳」pp. 42－45.　〖初出〗：*『新潟新報』1951 年 9 月 11 日．

➽「私のアメリカ史」pp. 118－120.　〖初出〗：*同 1951 年 2 月 4 日．

➽「チャタレイ初裁判寸感」pp. 206－207.　〖初出〗：*『東京新聞』1951 年 5 月 9 日．

【5371】「明治時代のホイットマン紹介者」『學鐙』　第 50 巻 7 號　丸善　1953（昭和 28）年 7 月 5 日　pp. 21－25.

【55Z1】　木村毅 / 財團法人開國百年記念文化事業會（編纂）『日米文化交渉

史 4：学芸風俗編』 洋々社　1955(昭和 30)年 12 月 1 日.

➽ 第四章七「ナサニエル・ホウソォンとその子」pp. 79－84.

➽ 第七章附「ヘルンの非難」pp. 163－165.

➽ 第八章「フランクリンと日本宮廷」pp. 170－187.

➽ 第九章「ロングフェロウと日本の新体詩」pp. 188－220.

➽ 第一二章「坪内逍遙をめぐるアメリカ人教師」pp. 273－305.

➽ 第一三章「浦島とリップ・ヴァン・ウィンクル」pp. 306－324.

➽ 第一五章「俳句とイマジズム」pp. 346－365.

➽ 第一六章「インディアンの女詩人」pp. 366－374.

【5611】『青年の夢：日本青年はどんな夢をみてきたか』 洋々社　1956(昭和 31)年 1 月 20 日.

➽「大文豪バーナード・ショウ」pp. 209－219.　〖初出〗：*『中学時代』第 2 巻 14 号 旺文社 1951 年 2 月.

➽「私の受験時代」pp. 255－265.

【5651】『文学修業』 洋々社　1956（昭和 31）年 5 月 25 日.　第 1～7 章は書き下ろしで，第 8～19 章は青年雑誌に寄稿したものを転載.

➽「序」前付 pp. 1－3.

➽ 第二章「心の故郷」pp. 9－35.

➽ 第三章「家・兄・姉・師友」pp. 36－59.

➽ 第四章「冒険小説」pp. 60－68.

➽ 第七章「西洋詩への道：独歩とワァーヅワース」pp. 85－112.

➽ 第一五章「外国人の日本文学批評」pp. 187－194.

➽ 第一六章「桑港会議と文学」pp. 195－202.

【5691】『大東京五百年：江戸のあけぼの』 毎日新聞社　1956(昭和 31)年 9 月 20 日.　〖初出〗：*『毎日新聞(都内版)』1956 年 1 月 5 日～6 月 23 日.

➽「日本橋の水と琴」pp. 64－65.

➽「江戸のシェークスピア英語」pp. 68－70.

➽「忠臣蔵の世界価値」～「シナ訳の忠臣蔵」pp. 170－176.

〖再刊〗:【5691】と【5741】を合冊・改訂した『大東京五百年文化史話：開けゆく江戸から東京へ』 恒文社　1979 年 10 月 30 日　pp. 35－318.

【56Y1】「エヴェリマン五十年祝典」『學鐙』 第 53 巻 11 號　丸善　1956（昭和 31）年 11 月 5 日　pp. 24－26.

【5731】 Kimura Ki (comp. and ed.) / Philip Yampolsky (trans.). *Japanese Literature ; Manners and Customs in the Meiji–Taisho Era*. 旺文社　1957（昭和 32）年 3 月. “Translator’s Preface” によると，【55Z1】における木村執筆部分から「日本文学交流史」(pp. 1－577) と「日米風俗メリケン化史話」(pp. 639－669) を，日本人向けに必要であった説明を削り，逆にアメリカ人向けの補足を添えながら，疑義のあった陳述も敢えて変更せずに英訳したらしい.

【5732】「東西文化交渉史」『英語青年』 第 103 巻 3 号　研究社出版　1957（昭和 32）年 3 月 1 日　p. 14 (110).

【5741】『大東京五百年：花ひらく東京』 毎日新聞社　1957（昭和 32）年 4 月 20 日. 〖初出〗: *『毎日新聞（都内版）』 1956 年 9 月 21 日～12 月 17 日.

➽「オランダ語入門」pp. 71－73.

➽「維新のマルセーエーズ」pp. 126－128.

➽「ホイットマンと東京政界」pp. 151－152.

〖再刊〗:【5691】に同じ，pp. 319－634.

【57Z1】「社会主義史と私」『新版明治文化全集月報 第十五號』 日本評論社 1957（昭和 32）年 12 月 25 日.　〖再録〗:『明治文化全集（旧版）月報総集』 日本評論社　1992 年 7 月 20 日　pp. 199－201.

【5881】『東京：文明開化 遺跡散歩』 光文社　1958（昭和 33）年 8 月 25 日. 〖初出〗:*『毎日新聞（都内版）』 1958 年 1 月 1 日～4 月（未確認）.

➽「明治皇后と近代小説」pp. 238－240.

➽「メリケン三文小説」pp. 241－244.

➽「紅葉の愛読書」pp. 244－247.

➽「明治の女性をうならす」pp. 247－249.

➽「妃殿下と小説」pp. 250－252.

【5981】「日米文学交流史話（四）:「独立宣言」をめぐって」『英語青年』第 105 巻 8 号　研究社出版　1959(昭和 34)年 8 月 1 日　pp. 20(428)－21(429).

【6051】『日米文学交流史の研究』 講談社　1960(昭和 35)年 5 月 10 日.「序」および「凡例」によれば,【55Z1】のうち「日本文学交流史」(pp. 1－374) から Mark Twain, Bret Harte, Joaquin Miller 論を除き，新たに 9 章を加えて学位請求論文としたもの．本書により 1961 年に早稲田大学より新制度学位令による第 1 号の文学博士を授けられている.

➽「序」前付 pp. 1－12.

➽「凡例」前付 p. 14.

➽ 第一六章「ポーと明治大正文壇」pp. 403－470.　〖初出〗:「Poe と明治文学（1)～(7)，(補遺)」『英語青年』第 103 巻 7 号～第 104 巻 3 号 研究社出版 1957 年 7 月 1 日～1958 年 3 月 1 日 を改筆.

➽ 第一八章「小泉八雲のアメリカ文学講義」pp. 503－542.

〖復刻〗:『日米文学交流史の研究』恒文社 1982 年 6 月 30 日.

【6441】『早稲田外史』 講談社　1964(昭和 39)年 4 月 1 日.

〖初出〗: 第十四章までが *『早稲田公論』1962 年 9 月～1963 年 12 月.

➽ 第四章「早稲田の学校系図」pp. 53－68.

➽ 第十一章「帝国大学と私立大学」pp. 161－171.

➽ 第十四章「日本最初の文学科」pp. 195－205.

➽ 第十六章「講師の異彩片山潜」pp. 218－228.

➽ 第十八章「早稲田大学の出発」pp. 248－268.

【65X1】「“Azure Psychology”と明治美学」『英語青年』 第 111 巻 12 号 研究社出版　1965(昭和 40)年 12 月 1 日　pp. 10(798)－11(799).

【6671】「『三四郎』の中の英文学」『英語青年』 第 112 巻 7 号　研究社出版 1966(昭和 41)年 7 月 1 日　pp. 52(460)－53(461).

【67Y1】「探偵小説　青騎兵解題」『新版明治文化全集 第二十二巻 飜訳文芸篇：月報 11』 日本評論社　1967(昭和 42)年 11 月 25 日　p. 1－20.

【6911】「二葉亭の名訳と対照しながら」『學鐙』 第 66 巻 1 号　丸善　1969 (昭和 44)年 1 月 5 日　pp. 44－45.

【6921】『丸善外史』 丸善社史編纂委員会　1969(昭和 44)年 2 月 22 日.
本書の「序」にも「もちあわせの知識で，でっち上げたので，記憶ちがい，勘ちがいもたくさんあろう」(p. 2) とあるように，正史たる【8091】とは執筆姿勢を異にする.

➽ 第一章「世界の丸善」pp. 1－54.

➽ 第三章「英語読本事始」pp. 88－149.

➽ 第四章「日本を変えた書物」pp. 150－194.

➽ 第五章「内田魯庵」pp. 195－268.

➽ 第六章「「学鐙」の西洋近代名著選」pp. 269－314.

【7051】「連載・明治文學餘話 (2)：郵便箱の歌」『明治文學全集 第 92 巻附録：月報 58』 筑摩書房　1970(昭和 45)年 5 月 30 日　p. 5. 〖再録〗：『明治文学余話』《リキエスタ》の会　2001 年 4 月 10 日　pp. 13－14.

【72X1】「解題」『明治文學全集 第 7 巻：明治飜訳文學集』 筑摩書房　1972 (昭和 47)年 10 月 30 日　pp. 395－410.

【72X2】「連載・明治文學餘話 (15)：「蒲団」のモデル」『明治文學全集 第 7 巻附録：月報 71』 筑摩書房　1972(昭和 47)年 10 月 30 日　p. 5.
〖再録〗：【7051】に同じ，pp. 40－43.

【7331】「連載・明治文學餘話（17）：「龍動奇談」のこと」『明治文學全集 第12巻附録：月報73』 筑摩書房　1973(昭和48)年3月　p.5.　〖再録〗：【7051】に同じ，pp.45－46.

【7431】「東京大学の英語講義（1）：明治10年代」『英語青年』 第119巻12号　研究社出版　1974(昭和49)年12月1日　pp.17(801)－19(803).

【7581】「連載・明治文學餘話（29）：獨學の長短」『明治文學全集　第61巻附録：月報85』 筑摩書房　1975(昭和50)年8月　p.5.　〖再録〗：【7051】に同じ，pp.69－71.

【75X1】『比較文学新視界』 松蔭女子学院大学学術研究会（発行）／八木書店（発売）　1975(昭和50)年10月20日（松蔭学術研究叢書）.

- 「序」前付 pp.1－5.
- 第二章二「郵便箱の歌」pp.33－35.
- 同三「クーパーの「ザ・タスク」」pp.35－38.
- 同五「高山樗牛」pp.41－45.
- 第三章四「二つの「三十六文豪」」pp.60－65.
- 同五「アーサー王物語」pp.65－70.
- 同六「シャロット姫」pp.70－73.
- 同七「テニソン」pp.73－77.
- 同九「島村抱月の「欧洲文芸思潮史」」pp.81－85.
- 第四章七「ワーズワース兄妹」pp.113－118.
- 第八章一「先ず「倫敦塔」から」pp.201－202.
- 第十二章「ロビンソン・クルーソー移入考」pp.295－303.　〖初出〗：『學鐙』第57巻11号 丸善 1960年11月5日 pp.38－43.
- 第十三章「「罪と罰」の思出」pp.305－335.
- 第十七章九「ジョージ・メレディス」pp.439－445.
- 第十八章「「三四郎」の與次郎を論ず」pp.447－476.　〖初出〗：「早

稲田大学と夏目漱石」『早稲田大学史記要』第1巻2号 早稲田大学大学史資料室 1966年3月30日 pp.83－112.

➽ 第十九章「バーサ・クレーと明治文学」pp.477－494.

【7731】「『ロブ・ローイ』を読む：スコットの小説と草創早稲田」『早稲田大学史記要』第10巻（通号第14号）早稲田大学大学史編集所 1977(昭和52)年3月31日 pp.1－24.

【7781】「日本英語史閑談（1）：徳川家康時代の英文和訳」『英語青年』 第123巻5号 研究社出版 1977(昭和52)年8月1日 pp.25(217)－27(219).

【77X1】「日本英語史閑談（2）：徳川家康時代の和文英訳」『英語青年』 第123巻7号 研究社出版 1977(昭和52)年10月1日 pp.29(317)－30(318).

【7821】『明治アメリカ物語』 東京書籍 1978(昭和53)年2月23日.

➽「少年雑誌の投書」pp.23－30.

➽「日本になった最初の林檎」pp.37－44

➽「最初の英語朗誦」pp.95－102

➽「おけい物語」pp.103－143.

➽「中浜万次郎の登場」pp.161－179.

➽「書後余筆」pp.235－238.

【7831】「『愉快な乞食』解説：ルンペンプロレタリヤの発見まで」『早稲田大学史記要』 第11巻（通号第15号） 早稲田大学大学史編集所 1978(昭和53)年3月31日 pp.33－58.

【7871】「解説」『明治初期翻訳文学選』 雄松堂 1978(昭和53)年7月25日. 別冊小冊子（全50頁）.

【7931】「ホーマア漫読」『早稲田大学史記要』 第12巻（通号第16号）早稲田大学大学史編集所 1979(昭和54)年3月31日 pp.1－27.

【7991】『私の文學回顧録』 青蛙房　1979(昭和 54)年 9 月 10 日.

〖初出〗:「投書人生歴程記 (1)～(30 完)」『学苑』 第 434～477 号　昭和女子大学近代文学研究所　1976 年 2 月 1 日～1979 年 9 月 1 日.

- 二「投書家から騎士になる」pp. 18－23.
- 五「中学に入らなかった理由」pp. 36－41.
- 六「初投書の一等当選」pp. 42－48.
- 七「郷里を脱走して大阪へ」pp. 49－54.
- 一一「狸のすむ山寺生活」pp. 75－80.
- 一二「早稲田大学へ入学」pp. 81－87.
- 一三「めぐりあい二人の女性」pp. 88－96.
- 一四「小説とモデル問題」pp. 97－105.
- 一五「落第もまた楽し？」pp. 106－114.
- 一六「明治から大正へ」pp. 115－123.
- 一七「師に弓ひく学生」pp. 124－132.
- 一八「早稲田大学時代」pp. 133－141.
- 一九「精読と早読の弁」pp. 142－152.
- 二〇「鳥取聯隊新兵訓練」pp. 153－163.
- 二一「内務班病気天国」pp. 164－175.
- 二二「日本と母校の新風潮」pp. 176－186.
- 二三「小学校友達の文壇登場」pp. 187－198.
- 二四「家庭教師から得たもの」pp. 199－210.
- 二五「ロシア革命の前後」pp. 211－224.
- 二六「大学から出版界へ」pp. 225－237.
- 二七「金銭を用いぬ宗教団体」pp. 238－250.
- 二九「大正の関東大震災」pp. 264－276.
- 三〇「プロレタリヤ文学論」pp. 277－290.

➽ 三一「フェビアン協会の仲間」pp. 291－304.

➽ 三二「『小説研究十六講』の縁」pp. 305－317.

➽ 三三「新潮社の『社会問題講座』」pp. 318－330.

➽ 三六「円本旋風の起原」pp. 357－369.

➽ 三七「投書家あがりの文士」pp. 370－384.

【8051】「木村毅自記略伝（いささかPR的に）」『早稲田大学史記要』 第13巻（通号第17号） 早稲田大学大学史編集所　1980(昭和55)年5月15日 pp. 111－115.　　1977年まで記述されており，p. 143には記要の編集者による補記がある.　〖初出〗：*「木村毅先生顕彰会趣意書」 1977年6月1日（3頁の冊子）.　〖再録〗：『文林』 神戸松蔭女子学院大学　第14号1980年3月20日　pp. 8－14.　『木村毅先生追悼展示会』 早稲田大学大学史編集所　1980年10月1日　pp. 7－11.

【8091】『丸善百年史：日本近代化のあゆみと共に 上巻』 丸善　1980(昭和55)年9月18日.　第二編（pp. 325－750）の執筆を担当.

➽ 第一章四「日清戦争をめぐり」pp. 330－335.

➽ 同五「女流の読書会」pp. 336－338.

➽ 同六「翻訳された西洋小説」pp. 338－343.

➽ 第三章六「輸入目こぼしの忠臣蔵」pp. 381－388.

➽ 第九章六「「学鐙」特別号」pp. 512－534.

➽ 第一七章四「逝ける人々」pp. 714－717.

《二次資料》

青山与平 「新聞人としての木村毅先生」『早稲田大学史記要』 第13巻（通号第17号） 早稲田大学大学史編集所 1980年5月15日 pp.43－49.

稲村隆一 「木村毅さんの追憶」『早稲田大学史記要』 第13巻（通号第17号） 早稲田大学大学史編集所 1980年5月15日 pp.27－32.

植村清二 「木村先生と丸善」『學鐙』 第76巻11号 丸善 1979年11月5日 pp.34－35.

岡野他家夫 「木村さんを憶う」『日本古書通信』 第44巻12号（復刊第428号） 日本古書通信社 1979年12月15日 pp.4－5.

尾崎秀樹 「木村毅論」『大衆文学論』 勁草書房 1965年6月25日 pp.69－80. 〖初出〗:『大衆文学研究1962・III』 第5号 南北社 1962年10月15日 pp.16－22.

尾崎秀樹（編）「木村毅年譜」『大衆文学大系13：下村悦夫・邦枝完二・木村毅』 講談社 1972年5月8日 pp.821－828. 末尾に「作者の自筆年譜を参照し，木村氏の校閲を得ました」とある.

紅野敏郎 「「學鐙」を読む（45）：大正期の木村毅」『學鐙』 第89巻9号 丸善 1992年9月5日 pp.48－54. 〖再録〗:『「學鐙」を読む』 雄松堂 2009年1月1日 pp.248－253.

笹本寅 「木村毅氏との一問一答」『文壇手帖』 橘書店 1934年2月28日 pp.190－200.

谷沢永一 「明治文化のチチェローネ」『大衆文学大系13：月報12』 講談社 1972年5月8日 pp.8－9. 〖再録〗:『署名のある紙礫』 大阪：浪速書林 1974年11月3日 pp.273－275. 『話すことあり聞くことあり』 潮出版社 1985年10月5日 pp.312－314. 『書誌学的思考』 大阪：和泉書院 1996年1月15日 pp.261－263.

谷沢永一 「木村毅」『日本近代文学大事典 第一巻』 日本近代文学館（編）

講談社　1977 年 11 月 18 日　pp. 510－512.　〖再録〗:『谷沢永一書誌学研叢』 日外アソシエーツ　1986 年 7 月 10 日　pp. 729－732.

谷沢永一 「自由出版協会前後」『日本古書通信』 第 44 巻 11 号（復刊第 427 号） 日本古書通信社　1979 年 11 月 15 日　pp. 4－5.　〖再録〗:『紙上の嵐』 潮出版社　1981 年 12 月 15 日　pp. 165－170.

谷沢永一 (編)/ 木村毅 「木村毅著書目録」『大衆文学十六講』 中央公論社　1993 年 7 月 10 日（中公文庫 き 21－1） pp. 421－459.　単行書およびそれらの再刊書のみで，共著書・雑誌・新聞記事を含まない.

〖初出〗: *『木村毅先生著作目録私稿草案』 私家版　1966 年 11 月 29 日.

〖増補再録〗: *「木村毅著書目録稿」『古書さろん』 第 1 号　大阪：アベノ天地書房　1969 年 9 月 1 日.　「木村毅博士著書目録」『明治文化研究』 第五集　明治文化研究会　日本古書通信社　1970 年 6 月 10 日　pp. 205－228.　「木村毅著書目録」『早稲田大学史記要』 第 13 巻（通号第 17 号）早稲田大学大学史編集所　1980 年 5 月 15 日　pp. 116－143.『谷沢永一書誌学研叢』 日外アソシエーツ　1986 年 7 月 10 日　pp. 817－843.　他にも転載先があろうが，以上のように増補が重ねられてきており，1993 年版が最新であろう.

谷沢永一 「木村毅・面白くて為になる」『學鐙』 第 92 巻 4 号　丸善　1995 年 4 月 5 日　pp. 4－9.　〖再録〗:『書誌学的思考』 大阪：和泉書院　1996 年 1 月 15 日　pp. 269－277.

中西敬二郎 「早稲田大学と木村毅先生」『學鐙』 第 76 巻 11 号　丸善　1979 年 11 月 5 日　pp. 32－33.

向井敏 「解説」『大衆文学十六講』 木村毅　中央公論社　1993 年 7 月 10 日（中公文庫 き 21－1） pp. 461－468.

2016 年 12 月脱稿